

然れども唯ジリジリと勝を制し、遂に結局に至らしむ。

奇捷を欲する戦將は、動もすれば大敗ある一例は則ち那破翁に於て之を見る、其の戦ふや常に人意を快くするの奇ありと雖も、或は莫斯科の敗軍あり、ウォートルローの大敗あり、然れども奇捷を制せし割合に大怪我のなかりしは、先づ普魯士の大布列的力王なる可き歟、瑞典の英主ゴスタピユス、アドルフユス王の如き、其の南進の猛なる、實に花花しかりしと雖も遂に戦歿を免るゝ能はず。

普王の兵を用るや實に神の如し、小蹉跌は時に之れありしと雖も、非常の大敗をなすに至らず、故に今世迄も、用兵家の模範と稱せらる、王の如きは、東西實に其類稀れなり。

短き寶劍

昔時ダマスカスより、アラビヤ王に一の寶劍を貢獻せり、王、朝臣と共に之を見て

其の實に名刀なるを賞せしに、群臣或は言ひけるは、此劍や實に名刀なれども、唯憾らくは其寸の短かきことをと、太子側に在て曰く「好し勇氣を以て一步を前めよ、然るときは此劍の短きを補ひ得む」と群臣皆感歎せり、太子の言は有名なる語として傳へらる這回旅順攻撃の如きも、其の攻具より論ずれば、我々は決して之を十分と看做し難きものあり、然るも我兵の勇武は能く此の不足を補ひ得て遂に之を攻陥す、誰か「勇武は兵器の不足を償ふ」の諺を信ならずと云ふを得む。

杜預と西洋紙

往時は左程に思はぬことも、今や西洋諸國の事を知り、其の史籍を讀み、其の産物などを知るときは、物品の上にも、東西の聯絡を、意外の處に見出すことあり、左傳の註釋に於いては、晋の杜預の註が最も用ゐられ、我國にても今日坊間に在る左傳と云へば、必ず杜註のものに限る程のことなり、杜預は當時に在て政治家たる

のみならず文學者として亦た卓絶せし人なるが、其左傳註釋を書きし紙は、西洋紙なりしが如し、或る支那の雜書(司馬晋の時代より遠からぬ者)に下の記事あり。西域の大秦國より良紙二萬卷を獻す、此の紙は一種の木質にて製せしものにて、水に浸すも破るゝことなし、宮廷にては珍重されしが、當時、杜預が述作あるを聞かれ、其の清書の料にとて、此紙の半を賜はれり云々と、今より考ふるに此紙は蓋し羅馬時代より製せられし、夫の羊皮の薄紙ならん、此紙は水に浸すも濡れ裂る憂ひなし、然れども當時の支那人は其の羊皮紙なるを知らずして、一種不思議の木より製せしものと思ひ、斯くは記載せしならむ。

圖 引 の 婚 禮

我國の新は、他國の陳なること多し、我國往時の文學社會に於て、新しく見えたる作物は、多く支那の舊物なり、殊に馬琴の如きは、其の小説に於て、新機軸を出せ

しこと稀れに、多くは支那の借物なること、人の知る所なり、然るに入犬傳の終に於て、八人の武士が里見の八公主と婚するに臨み、八筋の紐を持せて之を圖引となさしむる一條あり、婚禮法として、實に奇々怪々なるが、右は馬琴の創意なりしか、或は支那書に出所あるやと思ひ居たりしに、後ち開元天寶遺事を讀みしに、左の記事あり。

郭元振、少き時風姿美にして、才藝あり、宰相張嘉貞、納れて婿となさむと欲す、元振が曰く、公の門下の女五人あるを知る、未だ孰か恠ふを知らず、事倉卒にすべからず、更に待て之を付らむ、張が曰く、吾女、各々姿色あり、即ち誰か是れ匹偶なるを知らず、吾れ五女をして各一絲を持たしめ、子をして幔前に之を取らしめ、便ち之を牽き得る者を妻となさしめむと欲すと、元振欣然、命に従ふ、遂に一紅絲線を牽て、第三女を得たり、大に姿色あり、後ち果然夫に隨て貴達す。馬琴は支那の雜書に通ず、或は之より出しにはあらぬか但し暗合なるも知す。

雙六の傳來

我國に於ける年頭初春の遊は、歌留多と雙六なり、近年は廻り雙六の類のみ行はれ、以前の如き眞雙六は、之を遊ぶ者稀なり。

今の若き人々は眞雙六の何物なるやを知らぬ者さへ多し、此の雙六は、以前大名の奥向、武家方杯には古くより行はれたるものにて、其法は、雙六盤あり、二人相對して勝を競ふこと、碁又は將碁の如し、局の上に、雙方各々十五の黑白の石を有し、盤は二箇あり此盤の目に依て、我石が敵陣より早く味方の陣に入り來るを競ふふを大則とす其間に敵に切らるゝあり敵を切るあり、蒸と稱ふるあり、兀と稱するあり、予の郷里などにては、予の少年時代迄、年頭には武家屋敷にて、中々はづみたるものにて、今も尙ほ之を遊び居るならむ。

此の雙六を知らぬ人多しと見え、予の親族が嘗て或湯治場に此具を持行き、勝敗を

争ひ、大喝して盤の目を呼び居たる處に、巡查が賭博と認て踏込み、拘留せむとせし笑話あり、是れ二十餘年前のことなり。

此の雙六は、其の來ること極めて古き如し、或は隋唐と交通ありし頃に、我が宮廷に入て、夫れより民間に弘まり、今日に至りしものならむ、支那にては此種の雙六は、早く絶たる様なれども、唐時代の書には、往々雙六のことを記す、右に記する所を見るに我國の眞雙六に類す、必然同物なるべし。

唐の國史補に左の記事あり。

今の博戯に、長行なるものあり、最も盛なり、其具は局あり、子あり、子は黒黃、各々十五とす、采を擲つの般は二あり、其法、握槩に生じ、雙陸に變ず。

此文に據て察すれば、我國に行はれし眞雙六は、唐代に謂はゆる長行なるものならむ、而して長行は雙陸より一變し來りしものなれども、尙ほ雙陸の總稱を有したるなるべし、日本にては雙六として後世に其の稱を傳へしなり。

凡そ我國に於る斯る遊戯の類、其他今日に傳ふるものは、多く隋唐時代より入來りし如し、故に日本事物の起原を知らむと欲する人は、支那、宋、明、時代の書よりも、寧ろ之を隋、唐の書に求むる方、捷徑ならん。

其の本家なる支那に絶えて、却て日本に存在するもの多し、我が雅樂の如きも則ち其一なり、斯る古樂は獨り日本に存するのみ、支那にては之を見るを得ず。

雅樂の中なる、蘭陵王の舞曲は、唐の玄宗時代には盛に玩ばれしものなるが、右は其の以前より既に之れあり、玄宗の朝にては、幾分の潤飾を加へたるに過ぎず、蘭陵王は北齊の公子にして、勇武を以て稱せらる、而して極めて美男子なりき、敵陣を突破する毎に、其の面貌の婦人に似たるを厭ひ、自ら鬼の如き假面を被て、戦ひしと云ふ美談は、齊の頃より既に民間に傳はりたるなり、唐に至て更に曲調を修改せしのみ。

下戸の詩人

詩歌の名人は、必ずしも上戸とは限らず、折りには下戸もあるべきものながら、李白一斗詩百篇の如く、一盃の酒を飲み一首の詩を賦す、と云へる文人は往々和漢に聞く所なるが、牡丹餅一つを食て、一首の詩を賦すると聞けば、頗る不風流にて、其人なきに似たり、然れども世の中は廣きものにて、決して之れ無しと言ふを得ず、唐の撫言に、左の記事あり。

段維は煎餅を嗜む、一餅熟すれば、一韻の詩を成す。

左すれば下戸の斯かる文人もありし譯なり、但し此の煎餅なる物、果して牡丹餅の如く甘き物なるや否やは疑問とするも、何にしる上戸にては無き様子なり。

吉備大臣入唐の圍碁

予の幼時に、吉備大臣が入唐の事を根據とせる小説を讀みしことあり、其中に、吉備が唐の朝廷に於て、彼國第一等の碁客と勝負を競ひ、晴れの場合に、一石の勝を占めたるに、碁客の妻が夫の勝負を心配し、宮女となりて入込み其傍に在りしが、夫を負けさせじとて、敵の一石を偷み、之を嚙下だし、是より争論となりて、宮中の寶庫より、人の臟腑を透し見る鏡（即ち今のエツキス光線の如き物）を持來て、之を検査する場合となり、遂に其の腹中に石あるを發見せられて、吉備の勝に歸したりとのことを、面白く記載せり、此の小説は今も尙ほ俗間に有るならむ。

途方もなき面白き物語と思居たりしが後ち唐代の雜書を讀みしに、此の物語の出處と覺しきもの一二條を見出し、我國の古作者が案外にも博覽なるを知れり。

杜陽雜篇に、左の記事あり。

大中年中に、日本國の王子、來朝せり、王子は善く碁を圍む、待詔(官名)願師言に、勅して對手となす、(此人は當時支那第一と稱せらる碁打なり)師言、之と敵

するに及で、手を下すこと三十有三に至る、勝負未だ決せず、師言、君命を辱めむことを恐れ、手に汗し思を凝らし、鎮神頭と後に稱せられし一名手を打ちたり、云々、王子、目を瞪り臂を縮め、既に勝たざるが如し、鴻臚(接伴係)に語て曰く、待詔は貴國の第幾番目の碁客か、鴻臚、詭り答て曰く、第三なりと、實は師言は第一の國手なりき、王子答て曰く、願くは第一の人物を見む、鴻臚曰く、王子が第三の人物に勝ちたるときは、方に第二手を見るを得む、第二手に勝て後ち、第一手を見るを得む、今ま噪て第一手を見むと欲するも、それ得べけむやと、王子、局を掩うて而して歎じて曰く、小國の一は、大國の三に如かずと、眞なりと云々、後世好事者あり、願師言が此の時、第三十三手の鎮神頭を下すの圖を作る云々。然れば、(吉備大臣なるや否やは詳かならぬも)當時我が使臣と、彼國第一の碁客と、宮中に於て圍碁の技を圍はせし事實は、則ち之れありしなり、唯右の記事は、例の支那流、誇大の説にして、當時は吉備大臣が實際、却て勝ちしやも知るべからず。

又開元天寶遺事の中に

葉法善、一の鐵鏡を有す、物を鑑みること水の如し、人に疾病ある毎に、鏡を以て、之を照せば、盡く臟腑中に滯る所の物を見る云々。

又杜陽雜篇の中に

太曆年中に、日林國より光靈豆と龍角釵とを獻す、其國は海の東北四萬里に在り、其國に怪石あり、光明澄徹、人の五臟六腑を鑑むべし、又之を仙人鏡と云ふ云々。然れば、宮廷御庫の裡より、人の臟腑を照す鏡を取出せしと云へる一條も、其の出處は是等に在るべき歟。

又右の日本使臣が持來て進獻せし碁盤及び碁石のことを書するの條に曰く。

山楸玉局と、冷暖玉棋子を獻す、其言に曰く、本國の東三萬里に集真島あり、其上に手談池あり、池中に玉棋子を生ず、製度に由らずして、自然に黒と白と分る、又其石、冬は暖にして、夏は冷なり、故に之を冷暖玉と言ふ。

是等は、例の虛實混合ならん、然れども日本の或海邊に、往々白が濱、黒が濱と稱ふるあり、黒が濱に打寄する小石は、天然に黒く、白が濱の石は、天然に白し、余が郷里にも、亦た此濱あり、是等の石を採て棋子に製したるものを、進物として携へ行しやも知れず。要するに彼國の書は、幾分の誇大虚飾を免れざれども、髣髴として、其の事蹟を認め得べきことあり。

左側に沿ふ支那の通行法

唐の太宗帝は人民が城門を出入するの法則を定め、入る者も、出る者も、各々左側に沿はしむること、せり、即ち今日、日本に於ける道路、及び見附の出入に、入る者と出る者と互に左側に沿ふと同様なり、我は千年の下に之を行ひ、太宗は千年の前に之を行ひしを思へば、チト愧かしき心地す。

其頃、布衣の馬周なる者、意見書を上る、太宗之を見るや、巻を終るに及ばずして、直に召出し、種々質問あり、周の建言せし所のもの、總て皆之を行ふ、右に記する城門の出入法も、亦た此人の考案せしものにて、此人は、後ち中書令(大臣)にまで立身せり。

茶、蓮、茶

今日、世界何れの國にも、普通なる飲物は茶、珈琲、及び煙草なり。
 人の知る如く、茶の本家は支那なり、同國にて茶の始りは詳かならず、陸羽の茶經などを見れば、神農氏、周公、晏嬰、楊雄、司馬相如、の如き人々既に之を愛せし記事あり、牽強すれば、神農氏は百薬を嘗めしことあれば、必ず茶を嘗みたるに相違なく、又周公の爾雅には、既に茶の性質を記す、故に斯くは上世に溯る譯なれども、廣く世間一般の飲物となりしは、三國の吳の末頃にもあるべき歟、此頃の記事

には、既に「酒の代りに茶を賜ふ」との文あり、故に此の時代以後と見て可なるべし、然るも尙ほ、今より千二百年の上在り、珈琲などに比すれば甚だ古るし。
 茶經の作者陸羽は、唐代の人なり、其の書中に、茶の種類を記して、之を、犮茶、散茶、末茶、餅茶の四種に區別す、右の中、餅茶は、今の磚茶の如く固めたる物に似たり、即ち削て之を用ゐたるものと見ゆ、又茶の飲方も一樣ならず、末茶あり、散茶あり、又茶一味のみならずして、生姜、棗、陳皮、薄荷、等を加へて飲む方法もあり、然れば千餘年前は、一定の式ありと言ひ難きに似たり、併し張又新の「煎茶水記」等を見れば、茶に用ゐる水を非常にやかましく述べ、支那全國に於ける各所の有名なる水に就て其の等級を定めあり、然れば茶を飲むの式も全く無しと言ふを得ず。
 陸羽が茶樹の狀を記するや、全體に今の茶樹の如きものを常とすれども、巴峽附近のものに至ては其大さ合抱なりと云ふ、左すれば非常の大木もありし様なり。

今日、支那にて用る茶は、總て煎茶にして、恰も我國の番茶に似たり、其色、其味、總て此の如し(但し細かに味はふときは非常に細かき甲乙あれども)我國の煎茶玉露の如き飲み方は、彼地には幾んど之れなし、右は蓋し我國に限るものとす、其味の濃かにして且つ清き、世界中、獨り日本人の趣味にのみ適すべし。

今日支那にては、茶の外に、蓮茶とも稱すべきものあり、之れは蓮より製したるものにて、其法、蓮子を取り、子に附着せる細芽(小鳥の足の爪ほどの大きさの物)を集めて、茶の如く製したるものなり、故に容易に得難し、知らざる者は一見して之を普通の茶と思ふほどに能く似たり、然れども其價の貴きこと、茶に幾十倍す。

之を煎するの法は、茶に同じ、細かに味はふときは、茶の如く、峻烈ならずして、一種の蓮香あり、好事家に非ざれば用ゐず、蓋し支那南方には澤國多く、蓮は從て無數なるが故に、此の如き品をも造り得るなり。

珈琲

珈琲は、元と亞刺比亞より、西洋諸國に入りたるものなり、其の起原を記したるもの、下の如し、昔し珈琲樹のよく繁殖せる亞刺比亞の或地方に、一の寺院あり、其の院主が山羊を飼ひしに、他の山羊に比ぶれば、毛色に非常の光澤あり、之れ必ず食物の所爲ならむと注意せしに、山羊が其の近傍の珈琲の實及び葉を非常に食するの外は他に變りしことなし、依て必ず珈琲の力ならむと思附きたり、而て此寺の僧侶の顔色皆な光澤なき故、もし常に珈琲を飲ましめば、必ず顔色に潤澤出づべしと考へ、其實を炒り、之を粉末として、朝夕僧侶に飲ましめたるに、數年の後ち果して顔色潤澤を生ずるの好果を見たり、是より自然に傳播して、一種の飲物となり、廣く同地方に行はれたりと云ふ。

珈琲を飲むことの、始めて佛蘭西に入りしは、千六百六十八年(即ち二百三十七年

前)なりと云ふ、然れども英人の説にては、千六百五十二年、早く已に希臘人の英國に來りし者之を弘めたりと云ふ、孰れにするも、今より二百三十四十年の前に過ぎず、茶に比すれば世界一般の飲物となりしこと甚だ遅しと言ふべし。凡そ珈琲は、炙りたる實を粉に挽割りし後ち、直に飲まざれば眞の香氣を失するものにて、今日佛國等の贅澤家は、皆な此の如し、粉末にせしものを、二三日も經て飲むは、頗る味を知らざるものとす、我國の賣物などには、二三日は愚か三四箇月若くは半年以上も經過せしものあり。

煙草

茶と云ひ、珈琲と云ひ、他の食物と比して、左程に之を奇異なりとせず、唯之を煎じ、若くは粉末として飲むに過ぎざればなり、獨り煙草に至ては此の如く奇なるものなし、若し我々が千餘年の上に生れたりと假定せよ、我々の後世子孫が皆喜で或

る草を燻し其煙を吸ふて喜ばんとは、如何に考ふるも殆ど想像だも及ばざる所なるべし、斯る嗜好は逆も理屈ある民族中に始まり得られず、其の根源が亞米利加の蠻族より出しは、無理ならぬことなり。

蠻族の此風が、斯く迄に全世界を風靡するに至らむとは、實に意外千萬と言ふの外なし、我々も喫煙家にて、一日も之れ無るべからずと言へる仲間ながら、時として其始めを思ふときは、實に奇異の感なきを得ず。

其の昔し、人に先じて煙草を嗜みし英の一族が、得意に之を吹かし、室内は煙を以て充されし折、新參の若黨、入來て先づ其煙に驚き、後に主公の口より煙の出るを見るや、非常の驚きを以て、水桶を持來り、容赦もなく其頭より灑せたりとの記事は事實に相違なし彼は實に其の主公の腹中が火事を生せしと認めたるなり。

人が見たら蛙に爲りし話

節儉家が少し計の金を貯へ、之を秘藏する時に、「人が見たら蛙になれ」と言ひし笑話は、人多く之を知る、故に竊に金を藏するの記事に逢へば、之を形容して「人が見たら蛙になれ」の文句なきはなし、然るに支那にては眞に蛙と爲りたる物語あり、一讀せし時、抱腹に堪へざりき。

清朝の康熙の頃、常熟の林村に何太素なる者あり、素麵屋にて相應の生活をなせしが、銀十兩を手に入れしかば、之を麥圃の中に隠し置きたり、然るに一の傭工、知て其地に赴き、金を盗出して歸來りしが、半里ならずして、衣中に蠕々として動くものあるを覺ふ、乃ち走て人なき處に至り、銀を取て開き見れば、悉く蝦蟆に變じ、躍て草中に入る、大に懼れて歸來り、其事を本人の太素に白狀せしかば、太素此者と共に其處に至り、草中を見れば、蝦蟆にあらすして銀は固より儼然として在りしと、右は錢梅溪の祥異記中に記す此通りに行けば注文通りなり。

竿頭の珠燈

支那にも頓智の話多し、昔し明の時に巨富の内監あり、戯に一長竿を立て、其上に球もて飾れる燈籠を懸け、其傍に高札を立て曰く「梯子をも用ゐず、竿をも倒さずして、球の燈籠を取り得たらん者は勝手次第に持去るべし」と扱て右の兩手段に依らずして之を取るの術あるを得ざれば、五六日の間は皆人殘念がりて其儘になり居りしが、七日目に一人あり、來て其の長竿を倒さず、そつと其儘に井に持行き、竿の本よりそろくくと井の中に入れて突立て、手の達する所にて、燈籠を取去りたり、斯くすれば梯子もいらす竿も倒さずして、約束通りなればとて、大に人に羨まれしと云ふ。

油中の小判

百餘年前徳川の大御所時代、幕府の盛時、江戸に種々の見世物、盛に行はれし折、淺草に人目を惹きしものあり、そは桶の中に油を盛り、其中に小判一枚を置き、銀の箸にて之を取去る者あらば、其の取るに任すとのことにて、一挾を何文と定め之を出さしめて金儲けを爲したり、抜て此の小判を挟み取らむとて、人々非常にあせりたれども、挟み上げたる小判が油を離れ際に於て、常に取落さざる者なかりき、然るに一日、人あり來て之を油の中より挟みて徐に引上げ小判が將に油を離れむとする折、箸にて小判を刎ね上げ、其の落るところを箸にて挟み、之を取去りしと云ふ、後に聞けば、此者は大諸侯の有名なる料理人にて、魚箸を巧妙に使ひ、腕に覺えありしものなりと云ふ、昔時大名の料理人が、魚を料理するには、魚に手を觸るを不敬なりとし、魚箸と庖丁にて自在に魚を取扱ひたるものなり、故に其箸の利くは此種の人に限るなり。

黄金の釜にあらず

秦の始皇帝が、急雨を松下に避けしとて、之を五太夫に封じたりと云ふ、此の五太夫とは、第五位の太夫と云へる意味にて、五株の松を太夫に封せしにはあらず、然るも彼地にて、尙ほ五株の松と思ふ者あり、又二十四孝の中なる一人が、貧に迫り子を埋めむとて、黄金一釜を掘出したりと云へることあり、之を畫く者が多く黄金の釜を掘出せし圖を作る、或人の説に、右は誤にて、釜とは古の榘目の名にて、今の一斗、若くは一升と言へる唱への如し、則ち物を量るに、一釜二釜と言ひし譯にて、黄金を一釜の量ほど掘出せしとの意義なり、黄金の釜、其物にはあらずと、此説は稍や理あるが如し。

潤筆料

我國にて書家に文字を依頼し、之に謝禮を贈るを、潤筆料と唱ること普通なりし、然れども支那にては、詩文を作りし禮物に、専ら潤筆の稱を用ゐたり、晋宋の時代より唐に至る迄も此の稱ありしと見ゆ、清人の雜書中に左の記事あり。

潤筆之說、昉於晋宋、而尤盛于唐之元和長慶間如韓昌黎爲文必索潤筆云々

と左れば詩文にも潤筆と稱せしのみならず、韓退之も亦た詩文の御禮を澤山に取り居りたりと見ゆ、劉禹錫が退之を祭るの文に云く一字の價、輦金如山と、之れも謝禮を多く取りしことを謂ふなり。

仙家の日月

張以寧が爛柯山の圖に題する詩に云く

人説仙家日月遲

仙家日月轉堪悲

誰將百歲人間事

只換山中一局棋

と、斯く言はれて見れば、是も一理なり、仙家の一局の棋を終る時間に、人間世界にては、幾十年、多少の快樂をなし得るものとせば、仙家の日月も餘り珍重し難く見ゆ、支那人の詩には折々穿ちたるものあり。

側射面

此度旅順の攻壘にて世人の知る如く西洋の築城法には必ず側射角あり、何れの方面も、他方面より側射し得らるゝ方法なり、故に函館の紅葉臺場の如き式の者を生ず、西人は元と學理上より攻究して、此法を用ふることながら、和漢共に、實驗上より早く此法を用ゐたるものにて、今日に存する諸處の我が名城には、側射の角面を多少有せざるものなし、唯其の側射面が甚だ廣からざるを遺憾とするのみ。

此事は、慶長頃の武邊に巧者なる人は注意せしと見え、關ヶ原の役、豊臣氏の軍が、伏見城を陥れし時、江戸に在りし守將の妻女が、城陥りたりと聞き、城の圖を按し

て、必ず此の一角より敗れたるならむ、横矢を射る能はざる地勢なればなりと、云ひしとの記事あるを記憶す、謂ふ所の横矢は即ち側射の意義なり。

又明人の兵書に曰く、敵臺は宜しく三角の附城を築くこと菱葉の如くすべし云々と、又金人が、宋の汴京を攻めし時の記事に曰く、汴城には舊と曲折多し、蔡京之を方

にす、粘罕幹離不(敵將)城を視て而て笑ひ、炮を四角に植て、方に隨て之を撃つ、城既に引直なり、一炮の望む所、皆な立つ可からず云々と。

然れば一は横矢の爲に曲折を設け、一は敵炮の一面より叢射する、時、他面の安全を圖るにも、亦た角面あるを可とするの意味なるに似たり。

支那にて、火薬及び大炮の用は、宋の開寶二年頃より始まりしを確實とす、當時の書に、火薬は外國より來ると記す、然れども西洋にては又其源を遠く支那に出づとなす、詳かならず。

薩摩芋と鮪

或る人の曰ひけるは、若し薩摩芋と鮪が、得難き品物ならむには、如何計りか高價ならんに、惜いかな澤山すぎると、如何にも味ある言なり、物の價は味の美、不美より寧しろ其品の多寡に係る場合多し。

薩摩芋は、人の知る如く、暖地の産物なるが故に、歐洲諸國には絶て之れ無く、彼地の人は其味を知らず、予が倫敦に在りし時、偶ま贅澤なる店にて、芋に似たる物二個あるを見出し、取調べたるに果して其物なりしかば、早速に買入れて、此の二個の芋の爲に、態々二三の知人を招待し、之を蒸焼になし、打寄て、賞玩せしことありしが日本にて謂はゆる鬚附芋の類にて、味甚だ不美く、大に失望せり、然るに二塊の芋の價は六七十錢なりき、何れの地より來りし者か、其店にても産地を知らざりし。

昔の里芋の相場

柳亭種彦なる小説家の隨筆に、左の一章あり。

天明寛政頃の手鞠うたに「芋々いもいも芋屋さん、お芋は一升いくらちやへ、二十四孝でございませ、十六羅漢に負さんせ」とうたひしは、凡そ二十四文が一升の定價にて、時には十六文にも賣りし事ありしゆゑなり、文化の頃となりては「二十四文でございませ」、とのみうたひ、天保のはじめには「三十二文でございませ」、とうたひ天保九年の春より「六十四文でございませ」とうたひ、百文以上になりたれど、語路わるきゆゑか、それをば、うたひしを聞かず、菱川師宣の畫本、月並の遊び、八月の條に

月千金、芋一升や十五文

これは貞享年間の印本ゆゑ、當時は一升十五文が定價なりしならむ云々。

と、左すれば天明の頃は、一升十六文の價なりしものが、其後は百文以上に騰貴せし譯なり、總て何品に依らず、世を経るに従て、其價は高まり騰らざるものなし。

支那の米價と田地の騰貴

清の錢泳の記録中に、米價のことを記して曰く。

康熙四十六年江、蘇、常、鎮、四府大に旱す、此時の米價、一升到七文遂に二十四文に至る、雍正、乾隆、の初は米價一升十四文なり、後ち蟲荒の時、三十五六文に至る、乾隆五十年の大旱には、一升五十六七文に至る、是より以後は、荒熟を論せず、總て二十七八文より、三十四五文の間に在り云々

と、左すれば、康熙年間には一升七文の米が、乾隆五十年には、平均三十文まで高まり來りしなり。

又田價を記するの條に曰く

順治の初は、良田二三兩に過ぎざりしもの、康熙年間には四五兩に至る予が五六歳の時も、亦た七八兩に過ぎざりしも、今や五十年を経て、遂に五十餘兩に至る云々

と、左すれば四五兩の田地が、五十兩迄に昇りし譯なり、但し土地は戸口の増減に依り、高低を生ずる場合あるを以て、一概には論じ難し、此の五十兩は昇り過るが如し。

金と銀との差價

又西洋諸國にても、中古より近年に至るまで物價は、年毎に騰るとも下ることなし、五年十年の間には幾分の高低をなすことありと雖も、其の大勢は、平均して常に昂貴する一方なり。

要するに、世界諸國共に、諸般の物價は、後世に至る程、益々騰貴するものと言ふ

て可なり。

其故何ぞや、人口増殖して物品の需要増加し、此の騰貴を致すにはあらず、要するに貴金屬の産出が、世を經るに従て、其高を増加し、從て物品との割合に於て貴金屬の價が下落し、物品が騰貴するに過ぎざるなり、即ち他物品の産出は、人口の増加と稍や匹敵するものなれども、貴金屬銀類が、以前よりも産出の高を増加し、自ら下落し、他の物品が之に對して其價を高むるに因る。

其昔は、貴金屬のみならず、金屬とさへ言へば、非常に珍重されたるものにて、未開野蠻の民は、先づ鐵類古釘の類をすら珍重す、故に一個の鈎にても、之を珍重せしこと非常なりしと見え、上代記には、兄弟の尊が、鈎の紛失より、争ひを起せし物語も傳はれり。

今日とても、未開の蠻族は鐵類を非常に珍重して、他の貴重なる産物を、之と交易して惜まざるを以て知るべし、世の開くるに従て、鐵類、最も多く産出し、銅も亦

た從て増加し來れり、獨り金銀のみは、其の増加の割合が鐵銅の如く盛ならざるのみ、然れども銀は金に比すれば、産出の割合年を経て増加するが故に、金銀兩者の對價に於て、銀の方下落したり、錢泳が金銀兩者の比較を記録せし條に曰く。

日知錄に記す、明の洪武八年には、銀一兩、錢四貫を黃金一兩に換ふ、十八年の後には、五兩を以て一兩に換ふ、永樂十一年に至ては、金一兩に對して銀七兩五錢、然るに崇禎中に至ては、金一、銀十、となりしと云ふ、國朝康熙の初年には亦た金一に對する銀十に過ぎざりしに、乾隆年中に至ては、金一、銀二十となりしが近來は十八九の間に在り云々

と、彼國にても、金に對して銀價の益益下れるを知るべし、此の變動は、蓋し洋銀が彼國に入來りしより始まりしものと見え、同人の記事の末文に「近年は洋錢盛行はれ、銀錢共に賤し」云々と、之に依て見れば、支那にても、西洋との通交の開けし以來、西洋にて銀の算出多く、金に對して其價の下りし影響を受けたること、

尙ほ日本に同じきなり、唯我に比すれば、其の交易の早く開けしが爲め、影響を受けたること、亦た早かりしのみ。

將來は物價益々騰貴せむ

將來と雖も、物價は年を経るに從て自然に騰貴すべし是れ物品の産出と之に對する消費とが、相ひ副はざるが故に非ずして、多くは貴金屬たる金銀の産出が、割合に激進するに基くなり。

機械の作用、益々開け、科學の應用、益々進み、金銀の探掘より、其の精煉に至る迄、往時に比すれば、非常に費用を減じ其の事業が割合よくなるに從て、金銀の産出高を加ふること、益々盛なるは免るべからざる數なり。

殊に、汽車汽船の便に依て、世界中如何なる僻遠の地と雖も、貴金屬を産出する處には、必ず企業をなすの時代となりしを以て、其の算出の増加は又一層の激進をな

せり、今日の勢にては、貴金屬が、後來永く貿易媒介の標準たるの地位を保ち得るや否や、甚だ覺束なき程なり。

一方に於て貴金屬は多大の増加をなすに、一方に於ては取引に金銀を用ひざるの便法を工夫し、金銀實物を用ゐずして、手形若くは切手の類を代用し、名は金銀を用ゐて、其實は之を使用せざるの工風、日に發達す、若し事業の繁榮と共に、多額の貴金屬を用ふることに増加せば、貴金屬の下落は、幾分か之を防ぎ得べしと雖も、右と反對に、貴金屬を用ゐずして、取引をなすの便法は、長足の進歩をなす以上は、貴金屬の價は、下落せざらむと欲すと雖も得べけむや。

貴金屬の下落は、則ち物價の騰貴を意味するものにて、物價騰貴と言はむより、貴金屬の下落と言ふの正當なるに如かざるなり。

世界諸國の金銀在高と金銀の産額

五六年前米國の雜誌に、世界中の重なる國々の儲藏し又は流通せる金銀の總額を左の如く記載せし者あり。

金 七十八億三百八十萬圓

銀 七十八億六千二百二十萬圓

合計 百五十六億六千六百萬圓

右は元と米國の調にかゝるものにて、一弗を二圓と算し、右の如き割合となる。

右の百五十六億圓の金銀在高に對し、毎年漸に世界に産出する金銀高は如何と顧みるを要す。

千八百九十七年、米國造幣局の調と稱するものに依るに、二ヶ年に於る（千八百九十六年なりしと記す）世界各地の金銀産出高を合計せしもの大略左の如し。

金の産出高 四億七千五百萬圓

銀の産出高 三億六千六百萬圓

合計 八億四千一百萬圓
 此の金、銀算出高を以て、前記せる世界の金銀總有高に比較すれば殆ど其の百分の五強、即ち五分餘に當る。

此年の産出額を以て、毎年産出の平均數と假定すれば、二十箇年にして、世界各國現在の金銀總高は一倍に増加する譯なり、然れば貴金屬の價は、即ち一倍を下落せざるを得ず、之に對する物價は一圓の者が二圓とならざるを得ざる割合なり。但し尙ほ精確なる計算をなさむと欲すれば、世界各國に於て、一箇年間に消耗し去る金銀高を差引かざる可らず、即ち裝飾又は金銀箔に消費する高及難破船の爲め海に沈み其他不慮なる水火の災難に幾何の金銀を世界より損失するやを計算せざるべからず。

此事に付ては、一昨年なりしと覺ゆ、或る新聞紙に、外國新聞を譯載せしものあり、此の消費高を三千萬圓内外に計算し居れりと記憶す、元と貴金屬を用る器物は、成

るべく紛失せぬ様に心掛るものにて、日本にても、箔屋の床下には相應の金高ありとて、其土を焼て金を取るの譬すらあり、然れば金銀を用る裝飾品等は容易に失亡とはならざる物にて、此世界より消失すること少し。

左すれば、一箇年の金銀消費高を、三千萬と見積りしは、無理からぬことなるべき歟。

假に、此の三千萬圓を、上記せる産出高八億四千一百萬圓の中より差引くも尙ほ八億一千萬餘圓を餘ます譯にて、優に世界流通の金銀の五分は、毎年之を産出し居る譯なり（假令ひ年に因て多少の豊凶は之れありとするも）

此の如くにして、世界の金銀、焉ぞ増加せざるを得む、其の増加の極は、焉ぞ物價の騰貴を惹起し、貴金屬それ自身の下落を生ぜざるを得むや。

尾のある人

五六年前の新聞に、米國の或る一市にて、尾の生へたる人ありとの記事あり、勿論此者は白人種にして、齡二十四五歳、尾の長さ、一尺以上に及べりと云ふ、世間には斯る變物も往々之れありと見え、支那の書にも左の記事あり。

明の大曆年中に、洛陽の尉たる苗登は、尾あり、其長さ二尺餘に及べりと、又夸堅丙志にも、左の記事ありと云ふ。

臨安の米市橋の傍に、葦を賣る者あり、腰間に尾を生ず、長さ四尺餘、外出する時には、必ず繩にて腰に縛すること數匝なりし、小兒等の爲に見むことを求めて窘逐せらる。

と、然れば大評判の者なりしと見ゆ。

又一人の乞丐にも、尾ある者ありしが、其長さ、僅に四五寸にして、好事家の之を見る者、必ず錢一文を施したりと云ふ。

脊椎骨の都合にては、時に斯る者も生ずべし、進化論より言へば、我々の祖先も古は

皆な有尾なりしと言へば、左迄奇とするにも足らず。

連結せる雙生兒

孖生兒の兩體が肉にて連結せらるる者も、往々之れあり、七八十年前に、暹羅に生れし雙兒の連體せられたる兄弟ヨシとカンと稱へたる者は、西洋にて長く見せ物となり、有名なりし、此兩人は各々完全なる肢體を備へ、唯胸部に一塊の肉ありて兩人を連結し居りしと云ふ、筋肉のことなれば、次第に引延ばせしものならむか、兩人とも相ひ並で歩行し得たるのみならず、走行するも亦、自在なりし由、但し一人が睡に飽き、一人は睡を欲するときなどは、頗る奇觀なりしと云ふ、其の寢返りをなすときは、互に一方の體を越えて、身を轉ずるを得たりと。

察するに、是等の連結體は、其の幼時に、筋肉を切り放せば、各々完全なる一個人となりしならむ、七八十年前、支那にも亦た此類の聯生雙兒あり。

歙縣の槐塘地方に、程姓なる者あり、二男を生む、脊髓相聯なれり、則ち琴絃を以て之を鋸し、分て而して兩と爲し、藥を以て之に敷る、數日ならずして平癒し、肌肉を生ず。

と、然れば、雙兒を聯結せし背の肉を生れて間もなく、絲にて切りたるが爲め、完全なる二人となりしにて後ち此兩人兄弟は皆な壽九十餘歳に至りしと、是は乾隆初年の事の由。

撲滿

舊時より東京の坊間の荒物屋に、金錢貯蓄壺とも名くべき器あり、通例土燒にて、其形は寶珠の玉になり居り、大小種々あれども、通例は徑三四寸の物多しとす、其の上頭に小孔ありて、溜めたる錢を、之に入れば取出すこと能はず、貯蓄錢が其中に滿るに及び之を叩破て出すものとす、右は東京のみならず、地方にも往々之を

賣る者あるべし。

漢語にて之を何と名くべきやを知らざりしが、支那にては之を撲滿と名づくるを見出し得たり、其の記事に曰く

撲滿は、則ち今の小兒の積受罐なり、土を以て之を作り、錢を蓄ふるの具なり、入るべくして出すべからず、滿れば則ち之を撲つ、云々と、然れば其中に滿ちたるときは、矢張り打壞して出すものと見ゆ、流石に支那人だけありて、撲滿の二字は命名甚だ巧なり。

鉛筆

今は歐米にて鉛筆の用ひ廣く、我國にても之を用ること盛なり、然る處、世界にて、鉛筆を最も古く用ゐたるは、支那なるが如し、其の時代を考ふるに、遠く歐米の上

に在り。

支那にて、結繩の時代以後、眞先に用ゐられたるものは、人の知る如く、竹簡なり、竹簡に字を書し、書き誤るときは、小刀にて削り、之れを書き改めたるが故に、刀筆なる言葉は、今に遺れり。

然れども、竹は元と南地の産なるに、支那の最初に開けたるは北部なるが故に、竹を取寄することは、頗る面倒なり、故に竹簡時代に於て、又た木板を用ゐ、鉛筆を用て、之に字を記したるなり、即ち鉛を筆の如く尖らせて、木板に字を記したるなり、鉛筆なる、語は即ち是を謂ふ、此の時代は、遠く希臘羅馬、以前に在りしが如し、西洋にて鉛筆を用ゐしは、寧ろ近古に屬するものなり。

希臘時代には、薄き金屬の板の一面に、油く蠟をひき、針の如く尖りたる筆にて、之に字を記したるを普通とす、然れども羊皮の薄紙も、亦た程なく發明せらる、鉛筆の用ひは之れ無き如し。

又支那にて、此の時代より少しく下れば、書簡を往復する場合に、尺牘を用ゐたり、

尺牘とは、一尺許りの板を漆塗とし、(但し黒色を避く)之に字を認め、尙ほ一枚の板にて、之を蓋ひ、絲にて兩版を結び、書簡の用を爲せしなり、今日までも手紙を尺牘と云ふは、則ち、此の漆板尺牘より出でしなり。

又支那にて、上代の硯の形は、詳かならねども、唯だ單純に、墨を磨するの用を爲すのみにて、其形も一定せざりし如し、唐時代の硯は、其の中部が隆起して、瓦の如くなりしと云ふ、是れ墨を留めざるを貴びし故なりと、然れば硯の中は稍や凸形をなしたるなり、唐の中世に至ては、始めて平たくなり、近世に至ては、中を稍や凹くするに至れり、之は古式にあらずとのこと、物理小識に見ゆ、唐人が硯を名けて研瓦と言ひしは、其の凸くして瓦に似たるを以てなり。

水經と西遊記

世界にて、小説の最も奇なるものは、西に「アラビヤナイト」あり、東に「西遊記」あ

り、人或は前者を以て、後者に優れりと説く、然れども或る場合に於ては、却て後者の優れるを見る。

東洋にて、三大奇書のひと稱せらるる程ありて、西遊記の如く、奇々怪々にして快瀾なるはあらず、一たび之を繕げば、殆ど塵世の外に出る思ひあり、唯是れ、喜と笑との外は、何等悲哀の調あること無し、此の如きは東西の小説中、實に稀れに見る所、其の一節一項、悉く奇想天外より落ち来る、此の作者は殆ど不可思議の腦髓を有すと評して可なり。

然れども、よく考ふれば、人類の想像なる者も、何か據り所なくては叶はぬものと見え、此書の如きすら、其趣向の中、著者全くの創意に屬せずして、他より之を得來りしに似たるものあり。

孫悟空は、同書中の主人公にして、其の本體は彌猴なり、此猴が、天宮を騷がせし末に、釋迦如來の通力に依て、大巖石の下に壓伏せられ、數千年の後ち、三藏法師

の救解に依り此世に飛出すが如き一節は、如何にも非常の奇想なるに似たり、然れども是れすら、作者の創意にあらずして、其の出處と覺しきものあり左の如し。

水經に曰く、昔し禹が水を治めて淮水に至りし時、淮神、其姿を現はせしに、則ち一彌猴なり、地に爪して大水を起す、禹、因て之を執へ、大鐵索にて縛し、遂に龜山の下に封鎖す、淮水則ち平かなるを得たりと然るに後世、明の初に至り、明の高祖が龜山を過ぎし時に、力士をして、起こさしめて之を視むとす、依て鐵索を拽きしに、其鎖は船二艘に充ちたり、千人を用ゐて、之を抜き上げしに、一老猴、飛出せり、毛の長さ體を蓋ふ、大に吼ること一聲、忽ち躍て水に入り去る云々

然れば、猴と云ひ、禹の爲に封鎖せられて數千年を経たると云ひ、明の高祖の爲に發かれて飛出せしと云ひ、悟空の物語と相ひ類せずや、而て西遊記は明の季世に生じたる書なれば、猴が數千年封せられて飛出せしと言へる物語は、西遊記の著者の

竹 中 の 人

耳には、必ず入り居りたるものならむ、乃ち之を翻案せしにはあらざるか。

凡そ不可思議なる小説物語の類にも、東西暗合せるもの甚だ多し、右は必しも新者が舊者を引用せしにもあらざるべく、寧ろ人類の想像力が極めて狭きを證據立る者と見るの外なし、例せば、我國の竹取物語に於ける、竹中より人が生ぜし類も、支那に往々之れあり。

或書に、夜郎侯のことを記して曰く、女子あり、紗を洗ふ、竹中に聲あるを聞き、之を剖て一男を得たり、收めてを養ふ、後ち夜郎侯に封せられ、竹を以て姓となす、漢の武帝、賜ふに王の印を以てすと。

又異苑に載す、建安に員當竹あり、節の間に人あり、長さ尺許にして、頭足とも皆な具はると。

我國の物語は必ずしも之を取りしにはあらざるべし、唯人類の想像が相ひ似たるを知らしむるに足る。

相 似 似 たる 話

希臘古代の神話に、或神が白鷺と化して、女と交るの物語あるは、人の知る所、又羅馬人の祖先が、狼に養はれたるも、史を讀む者の知る所なり、然るに、支那にて、章安の一女が鷺と交りし物語あり、又支那の書には、突厥人の祖は狼と交て生ると記す、蓋し羅馬始祖の物語が、東方に轉々し、支那には突厥人の始祖として、之を傳へしものならん。

毒 蛇 の 退 治 法

又希臘の古き物語に、或勇士が、九頭の惡蛇を退治せし時、其の一頭を斬去て、他

の頭を斬る間に、前に斬られし一頭より、更に新たなる一頭を生ず、此の如くして、斬れば生じ、生ずれば斬り、遂に之を平ぐること能はざりしが故に、最後に、首の切口に、鐵を溶して湯となし、之を灌ぐに至て、始めて退治し得たりと云ふ、支那の廣異記に、雪州の郡將たる歐陽紹が、毒蛇を退治せし時、其首を斬り、鐵を溶して之に灌ぎたりとの事を記す、是等も人類想像の稍や似たるを示す。

似たる想像

尙ほ人類想像の相似たるを知るに足るべき、左の物語あり、今より百年前、舊幕の頃、江戸水道の源たる、井之頭の辨天の池を乾上げ、其の水源を清むるの企をなせしことあり、將に着手せむとする前夜に、此事を擔當せる役人の家に、一客の來り訪ふあり、其の出立衣服等、一切當世の粹を盡し、如何にも身分賤しからぬ様子に見えしが、其人の語りけるは「明日、井之頭の池を汲み乾す由、同處には、多年、

池の主となりて、棲なれし大鰻あり、若し之を捕ふるとも、放ち遣られよ、決して殺し給ふべからず、吳々も頼入るなり、とて手土産など取出だせしかば、折柄麥飯を炊ぎし故、是にて食事を饗應し、固く約して、客人を歸したり、扱て翌日、此の役人は餘儀なき他の公用の爲め、池の檢分に赴くの時を遅くれ、晝後に至り見れば、人夫共は既に池の中より、大鰻を捕へて之を殺しあり、之を點檢せしに、腹の破れたる處より、麥飯の溢れ出るを見て、扱はと愈々昨日の事に思ひ當りしが、其約を違へし故にや、此の奉行の家は、後ち遂に零落せり云々と。

支那の耳談に云く、天長の劉萬なる者、魚を捕るを以て業とす、其の魚を捕るや、蘆竹を以て箔となし、而て發らき見る、之を起籠と云ふ、一日、僧あり、門に到り、食を乞ふ、織白異常なり、偶ま厨中に碎米飯の熟するあり、依て共に食ふ、既に去る時、劉に語て曰く、君、籠を起さば、必ず大魚を獲む、慎で殺す可らず、君、白龍の魚服するを聞かずやと、既にして而て籠を起す、果して大魚を獲たり、劉、捨

つること能はず、之を剖けば、腹内、尙ほ是れ前の碎米飯を見る、蓋し前の僧は、大魚の化する所なり、劉、是れより、一家、皆な病で死す云々。

雪達摩

大雪の後ち、雪を集めて、人の形を作るを、日本にては雪達摩と云ふ、英國にては、スノウ、マン(雪人)と云ふ、支那にては何と稱ふるやと思ひ居たりしに、或書に之を雪將軍と記しあり。

梨酒

凡そ、大抵の菓物は、醸して酒とならざるものなし、葡萄の葡萄酒に於けるは勿論のこと、林檎の「サイダア」に於ける、人皆之を知る、依て想ふに、梨も亦た醸して酒と爲し得べきならむ、唯だ其儘に食て、高價なるが故に、歐米の人は、之を酒と

爲さるるにや、支那にても嘗て偶然に梨を以て酒を醸し得たるの記事あり。

一書に記す、李仲賓の家に梨園あり、樹の大なるものは、毎樹に梨二車を收む、一年、盛に生て、常年に數倍す、人の售らむことを求むるなし、甚だしきは用ゐて以て猪を飼ふに至る、所謂る山梨なるもの、味極て佳なり、意、頗る之を惜む、乃ち大甕を用ゐて數百枚を蓄へ、缶を以て蓋ふて其口に泥す、久しく藏して取食はむと欲せしなり、既にして而て之を忘る、半歳の後に及で、園中に至れば、忽ち酒氣を聞く、守舎者の釀酒の熟したるやと疑ひ、之を索れば有ることなし、因て貯藏の梨を啓き觀れば、即ち化して水となる、清冷愛すべし、湛然として甘美なり、眞に佳酒なり、之を飲めば、輒ち酔ふ、回々國の葡萄酒は、止だ葡萄を用ゐて、之を醸す、初より雜ふるに他物を以てせず、始て知る梨も亦た酒を醸すべきなり云々と、我國にて梨は歐米の如く高價ならず、試て可ならんのみ。

人の名

嘗ても述べし如く、人名は多く時事の著るしきものを紀念に取ること多し、故に日露開戦、我軍の連勝なるより、「勝」と云へる名が、男にも女にも、命名せらるゝこと夥しきは、左もあるべし、或る新聞の記する所にては生兒に「露勝」と命名して届出たる者ありしかば、役場にて「是は露西亞が勝つと言ふ意味」なるが如何と問ひしに、イヤ露西亞に勝つと云ふ心持なりと答へしにぞ、然らば「勝露」となすべしと諭して、遂に其の如く改めしと云ふ笑話すらあり。

其初め人類が未開の時に當ては、何角なしに、強き者が勝を制するが故に、人の名は必ず猛く荒びたるものを貴び此類の名が十の八九を占めたるものなり、今日歐米人の用ふる耶蘇名、は皆な古昔傳來のものにて、或はヘブリユウ出のものあり、希臘、羅馬出のものあり、何れも大抵は千餘年以前よりの傳來ならざるは莫し、故に従て

亦た荒び猛々しき意味を有せざるもの稀れなり、而て左に掲ぐるは概ね皆な、希臘羅馬馬出のものなり

- マルチン(Martin.)とは「好戰」と云へる意義なり
 - ナポレオン(Napoleon.)とは「森林の洞の獅子」と云へる意義なり
 - ルーター(Luther.)とは「名高き戰士」と云へる意義なり
 - レオナルド(Leonald.)とは「獅子の如く猛し」と云へる意義なり
 - ハーバート(Herbert.)とは「軍隊の名譽」と云へる意義なり
 - チャーレンス(Charles.)とは「強勇」との意味なり
 - ブラインアン(Brian.)とは「剛」の意味なり
 - アルノルド(Arnold.)とは「鷲の如く猛し」と云へる意義なり
- 併し、ヘブリユウ民族は、宗教の民にして、武を主とせざりしが故にや、ヘブリユウ源のものには、却て武の意味を表せざるものあり、例せば

アイザック (Isaac) とは「笑ふ人」と云へる意味なり
 トウマス (Thomas) もヘブリユウ源のものなるが、是は「雙生兒」と云へる意味なり、蓋し其初め祖先が雙生兒にて斯く名付けられしに、遂に其の子孫に至るまで、此名を傳へしものと見ゆ。

又、モーセス (Moses) と云へる名の意味を知る人少きに似たり、右は彼の有名な、モーセスの爲め一種の高尙なる意味と思ふ者あるべしと雖も、此語は、元と埃及源のものにして、「水より引揚げらる」と云へる意味なり、則ちモーセスを埃及の公主が、水中より救上げたるが故に、當時、公主は直に其の意味の名を、孩兒に付して、之をモーセスと命ぜしものと見ゆ、例へば髓の長き者を長髓彦と綽號し、遂に其人の名となりしと同様に、埃及の宮中にて、此人の生長するまで斯く呼びしが故に、其儘、ヘブリユウ人の中に傳はりしものならむ。
 又ヘブリユウ源の婦人名にて、アーン (Ann) と云へるは「愛敬」と云へる意義なり、

流石に婦人には似合し、又エリサベス (Elizabeth) なる婦人名は「敬神者」と云へる意義なり、又希臘源の婦人名なるヘレナ (Helena) の如きは「光明」の意義なり、ヘブリユウ源にして、ジョン (John) とは「神の喜ばしき賜物」と云へる意義
 ショセフ (Joseph) とは「彼は繁榮すべし」と云へる意義
 ノア (Noah) とは「安寧」の意味

總て此の如く、ヘブリユウに屬するものは、勇猛なる意味より寧ろ他の事柄を表はすもの多し、拉典、日耳曼源のものには、總て荒びたる性質のもの多きに似たり。斯く、歐米の耶穌名には、皆それの深き意義ありて、其源は數千年前より來りしものなり、然るに、可笑しきは、我國開港の當時、我が國人の眼には、歐米人の名に、是等の意味ありとは知らず、名は唯、人を區別する符牒なり、何にても良しと思ひしにや、好事家の中には「ヘンレケ」又は「ヘンライ」杯と自ら無意義の名を付して、喜びし人もあり。

奇なる姓名

或記録に依れば、文化元年三月、幕府より、諸大名に面白き姓名の者ありやとの尋ねに對し、諸藩より申立てし面白き姓名を書上げたるものあり、左の如し

- 松平豊後守内 七寸五分刑部左衛門 松平豊後守内 仁禮正膳六
- 松平相模守内 古屋敷跡新九郎 松平政千代内 谷谷谷
- 松平政千代内 八幡男也 松平政千代内 三方一所典膳
- 有馬中務大輔内 太田又三郎兵衛之助 松平越前守内 狩野鹿右衛門
- 藤堂和泉守内 七里鎌倉左衛門 宗對馬守内 竹串傳角左衛門
- 小笠原左近將監内 松飾目出度左衛門 松平甲斐守内 穴山宮内兵衛
- 酒井新十郎内 神下太八左衛門 酒井新十郎内 一石八斗兵衛
- 鍋島阿波守内 嬉野白石諸家太郎 小野日向守内 大岡田村新三助五郎左衛門

- 松平周防守内 草刈鎌太左衛門 松平壹岐守内 加賀自由兵衛
 - 牧野佐渡守内 四月朔日夏右衛門 水戸家 野口山野狐六
 - 奥平大膳太夫内 菅沼筑紫胎姪高山 奥平大膳太夫内 綾彦太懷刑部左衛門
 - 本多中務大輔内 長坂血槍九郎 毛利甲斐守内 百貫満足兵衛
 - 毛利甲斐守内 一三三四五六 京極能登守内 今
 - 牧野河内守内 入交彌六左衛門 松平兵庫内 大恩有難左衛門
- 幾んど姓と名との境を區別し難き者あり、随分面白きものなきにあらず、然れども維新後の今日の如く、無茶苦茶なるは無し、若し精密に取調べなば、其の奇々妙々なる姓名は、必ず文化年代に幾十倍すべし。

名士と名花

或人、花を評し、梅は年増盛りの佳人に似たり、桃は舍田娘に似たり、櫻は振袖の

御姫様に似たりと、此評當れるが如し、左らば海棠は何と評すべきや、或人曰く、此花は白拍子に似たりと。

古より知名の士が、花に托して名を後世に傳ふるを得る者あるは、其の清福、羨むべし、梅と言へば林和靖の持物の如く、菊と言へば陶淵明に限るが如く、周茂叔の蓮に於ける、ピーコンスフィールド卿の櫻草に於ける、此花を畫けば其人を想はしめ、此人を思へば其花を想起せしむ、櫻町中納言とか云へる功業にも文學にも、何等の出来したることなき人すら極めて櫻を愛せしとして、今の世迄も、其名をば物語に記載せらる、花を愛するの得も亦た小ならず。

人も花に依て名を傳ふるとは言へ、花も亦た人に依て後世に持躰さるゝの得あり、蘭の如きは、其の芬芳、固より愛すべきものなりと雖も、若しも早く屈原の楚辭に稱揚せられざりしならば今日の如く文人詩客には愛せられざりしならむ、菊とても同様、屈原の賦中に入りし爲に、殊に其の品格を上げたるが如し、和靖の「疎影横

斜、暗香浮动」、の詩は梅に一層の品格を與へ淵明が「採菊東籬下」の句は、菊に一段の光彩を加へたり、然らば一概に、花に依て人が傳はるとのみ言ひ難し。

櫻の歌と發句

何處迄も品格よきは和歌なり、又氣の利きて面白きは俳諧なれども、憾らくは、時として無下に品格の賤しきものあるは、疵なり、同く櫻の吟詠にても、和歌は緩和の調多し、俳諧は何處迄も短刀直入なり、併し中々に面白きものも多し。

本箱の古人を花の留守居かな

調は下れども、我々には適切にて、覺えず人を失笑せしむ。

同く花を愛するの句意にても、和歌なれば

春の花ながむる儘の心にて

いく程もなき世を過さばや

と言ふ處を、俳諧にては

はな咲て死にともないが病かな

と詠す、兩者の意味、大體は同じきに、一方は婉曲、一方は露骨。

吉野やま花や盛りに香ふらむ

ふる里さらぬ峰の白雲

の和歌に比すれば

峰の雲少しは花もまじるべし

の方、大に優れり、此の少しはの三字は圈點なり、右二首に於ては、無論俳諧の方に團扇を擧げざるを得ず、又

山寺の春の夕暮きてみれば

入相の鐘に花ぞ散ける

の如き、如何にも善き境を捕らへたるものなり、平凡の句に似ながら、其境を想像

するときは、人をして得も言はれぬ心地あらしむ、然れども尙ほ

花のくも鐘は上野か淺草か

の方に一層の餘韻あるを覺ゆ

其の言ひ盡さる處、蓋し俳諧の妙處なるべし、又

花を宿戻りたければ戻るなり

何ぞ其の自在なるや。

花に染て浮るゝ十日ばかり哉

又

世の慾も花に止まる七日かな

何れも平凡ながら實際なり、但し

雲霞いづれぞ花の梢なる

に至ては前の「少しは花もまじるべし」に比すれば、下ること數等。

櫻花みち見えぬまで散りにけり

いかゞはすべき志賀の山越

夫の「わたらば錦、中やたえなむ」と同意味にて其の優美なる心は何處迄も和歌に相應なり。

こゝに來ぬ人も見よとて櫻花

水の心にまかせてぞやる

流水が落花を載せ去るを詠したるもの如何にも情あり。

春ごとに見るとはすれど櫻花

あかでも年の積りぬるかな

「大方は月をもめでしこれぞこの」と其意を同じくするものながら、吟じ來れば悪しからず、能因法師の

櫻さく春は夜だになかりせば

の句は

夢にも物は思はざらまし

世中にたえて櫻のなかりせば

春の心はのどけからまし

よりも、更に味あるを覺ゆ。

花見にと人は山邊に入りはて、

春は都ぞさびしかりける

今年(ことし)は戦時(せんじ)にて、花見(はなみ)に遠く出る人もあるまじけれど、若し(わ)し常年(じやうねん)ならば、吉野(よしの)に、上方(かみかた)に、出掛(でかけ)る人も多(おほ)からむ、左(さ)すれば、都(みやこ)は幾分(いくぶん)さびしとも看(み)るべき歎(なげ)か、昔(むかし)も今(いま)も同じ(おな)じやうに見(み)ゆるも可笑(わ)か。

花(はな)に往(い)つて歸(かへ)るさ悪(わる)るし白拍子(しらべうし)

とは、ちと露骨(ろこつ)、同じ(おな)じくば

花見ると家路におそく歸るかな

まつ時過ぐと妹や云ふらむ

の方、餘情多かるべし、兎に角、露骨に過るは俳諧の疵なり、然れども、右は概評のみ、悉く然りと言ふにはあらず、俳諧にも頗る品よきものあること勿論ながら、多く此弊を免れざるのみ。

花に來てみな花知らぬ花見かな

善くは出來たり、然れども餘韻の吟するに足るものなし、右に比すれば

道づれば蝶よ雲雀よ花の旅

何ぞ其の悠々自適なる、暑つからず寒むからず、身に快く輕き春衣にて、花曇りの空に立出れば、雲間には雲雀の轉る聲、道邊には得知らぬ種類の幾羽の蝶々の舞ひ戯ふる、中を、青草の野路を辿り、見渡す限り菜の花など咲出る、花見の旅は、如何にか快き、唯だ右の句を打吟するのみにても、亦た塵世の人に非るを覺ゆ、總じ

て歌にあれ俳諧にあれ、其句の巧ならむより、唯だ好き境を捕らへて之を有の儘に詠出したるものこそ、棄難き趣あれ。

松に夜をのこして花は明けにけり

巧に過るやうなれども、花の曙の形容は、目に睹る如し。

見あぐるも花なり踏むも花の雪

有り體ながら、これも棄てられず、併し

雨のほか音なき夜なり花明り

其餘韻ふかし、春夜朦朧の景、描き出して妙

花をふみし草履も見えて朝寢かな

昨日の興や如何ならむ。

花の山たゞわめいても面白し

尙ほ些の俗氣を脱せず、寧しろ

ところへ花はき寄せて寺寂しの境の眞なるに如かず。

牡丹

牡丹は本来舶來種に相違なきもの乍ら、何れの頃、何れの時代に輸入せられしや、其の事は左して舊からざるに似たり、何となれば、古代の和歌杯に牡丹を詠じたるものは、幾んど見出だし難ければなり。無論支那より我國に輸入せられしには相違なきものなるが、本家たる支那にても、此花は左して舊るきものにあらず、唐以前には、殆ど其の存在を認むる能はざる程にて、玄宗皇帝時代より、稍や廣まり始めたる如し、然るも其の頃は、未だ牡丹と稱せずして、木芍薬と名けられたり、其證には、開元天寶遺事に、左の文あり。初め木芍薬あり沈香亭の前に植ゆ、云々

と又、醒酒花の條に、左の記事あり。

明皇、貴妃と興に華清宮に幸す、宿酒始て醒るに依て、妃子の肩に凭り、同く木芍薬を見る、云々

と、斯く牡丹を叙するの條に於て、常に木芍薬と記するを見れば、當時は専ら此の名稱を用ゐたるを知るべし、然れども、其後幾ばくならず、晚唐の頃には、牡丹の名は既に盛に行はれたり。

白樂天が、杭州の知事となり、西湖の邊に住みし時は、江南にても、牡丹は未だ甚だ稀れなりしと見え、西湖の邊にて、新らしく此花を植ゑし者ありて、此人が詩を賦せし記事あり、又此人の友なる詩人中には、此花の名を知らずして、其の妖艶に驚きたるの記事もあり(今ま書名を思ひ出ださず)左すれば、開元天寶以後に至り、廣く世間に愛植せられたるものならん、併し唐の以前、南北朝の北齊の頃にも、既に此花ありと見え、尙書故實に、左の條あり。

世に曰く、牡丹の花は近頃に出でたりと、蓋し國朝の文士の集中に、牡丹の詩詩なきを以てなり、然れども張公嘗て曰ふ、楊子華の畫ける牡丹あり、極めて分明なりと、子華は北齊の人なり、乃ち知る牡丹の花も、亦た既に久しきことを。斯く北齊の頃より之れありとするも、唐代の書に於て、牡丹が近頃に出でたりと稱せらるゝの記事あるより考ふれば假令ひ南北朝の頃にありとするも尙ほ甚だ少かりしに相違なし。

日本より言へば本家たる支那にてすら、玄宗時代に、始めて廣く愛せらるゝに至りしを思へば我國に入來りしは、尙ほ其の以後に在りしこと稍や疑なきに似たり。

牡丹と猫の圖

牡丹を畫く時、其傍に猫を添ふるは、支那にも古より有る圖なり、明人の隨筆に、此意を説明して曰く、昔人が牡丹を畫くに、一枝盛に開き、側に一猫を蹲らす、其

晴は線の如し、識者の曰く、是れ日午(午十二時)の牡丹なりと、蓋し猫の眼睛は以て時を驗すべし、語に曰く、子午の時刻には、線の如しと、凡そ花は盛に午に開く、午猫は其花の盛を記するなりと、即ち猫の眼睛は日光の最盛なる午時には細きこと線の如し、此の眼睛を有する猫を、花の側に測ふるは、即ち日中牡丹の盛りを畫くの意を表はすものなり、稍や利窟ありと云ふべし、然るに我國の繪には往々、牡丹花下に睡猫を添る者あるを見る、右は無意義に近し。

牡丹に猫の圖は、右の理あるを以て宜しとし、偕て牡丹に獅子とは如何なる意味より來りしか、一は百獸の王、一は花中の王、然れば此の雙盛なる者を配合せしに止るにや、支那の古畫には、餘り之を見掛けぬやうなり、蓋し右は石橋獅子の舞と歎云へる舞曲より起りしにはあらぬ歟、石橋の盛なるを裝ふに満開の牡丹を以てし、其の間に獅子を狂はしむるは、一寸宜き思附きなり、何か出處のある事にや、此舞よりして日本にては牡丹と獅子が附物となりしならん歟。

畏と服との別

世人、動やもすれば、韓國の君臣を評して、反覆常なし狡獪にして油斷ならずと稱すれども、同國古來の事情を想像すれば、亦た是非もなき成行あり。抑も服すると畏るとは、格段なる相違あり、服するとは中心より人に心服するものを言ひ、畏るとは、心服せざれども威武に怖れて已むを得ず之に屈從するを言ふ、古より韓人の支那に於けるは、服するなり、日本に於けるは畏るゝなり。支那は東洋文化の本家にして、一切の徳教は勿論、其他百事百物の本源たる姿ありしが故に、古來韓國の君臣は、之に服事するを以て當然の事と心得、己より數等の上にある文化の國に服事するは耻かしく思ひ居れり、之に反して日本は、古來同國に何等の文化を興へしこともなし、否な其昔は我こそ彼に倣ひしもの多きなり然らば彼れが日本を目して、文化の度は己れより以下なりと認めたるも當然なり。

り、開港以後こそ、我國の百事は進歩しつれ、其の以前に在ては、朝鮮人來朝の時などを見よ、日本の儒者學者として社會の儀表たるべき人物等も韓國の使節には、一目、置きし有様ならずや、豊太閤の征韓の役ありしより、韓人は我に對して唯だ其の畏るべきを知るのみ、一も其の服すべき所あるを知らざるなり、支那と日本とに對する、彼の國人一般の感情は、中世以來、實に此の如くなりし、此の思想の傳來や延て近年に及ぶが故に容易に我國に心服せず、唯だ其の威武に怖れて、一時の安を求むるに外ならざるに似たり。

今日に於て我が威武は餘りあり、此上の必要は、彼をして心服心折せしむるの一事のみ爾か爲さむと欲するには、彼國の事物をして一切西洋流儀に變更せしむるに在るべし、一事一物も東洋の舊風は、西洋風日本風に及ばざることを知らしめ、百事百物、今の文化は大に古の文化に超越し、古の文化は頼むに足らず、今の文化は其上に秀出すると數十等なるを知らしむるに在るのみ。

今の文化が古の文化に超越するの争ふ可らざるを知らしむるときは、今の文化に於て、日本が清國の上にあることは次第に明白となり、事々物々、日本を其の師表とするに至るべし、然るときには、畏るゝに加ふるに、服するを以てし、彼の國人をして、其の中心より我に服せしむるを得るに至るべき歟、尤も之を成遂ぐるは、一朝一夕の易きにあらざると雖も彼國をして長く我國の恵に浴せしむるの道は、蓋し此の手段あるのみ、故に何事も務めて西洋風を流行せしむるは、是れ則ち彼れの心服を啓らくの道なり、彼をして心服を啓かしむるは、彼をして永久、我に師事せしむるの基礎なり、此事の成遂げらるゝ迄は、韓國君臣の中心よりする信頼を得るは甚だ覺束なかるべし。

殊に今日となりて迷惑なるは豊太閣の朝鮮征伐なり、熟ら當時の事を想ふに、我軍は唯だ威武を以て、韓人を恐怖せしめし外、何の施す所もなかりき、故に「日本人は概して虎狼の如きもの」と認め三百年來今日に至る迄も、韓人は當時の災厄を以

て千古無比とし、日人の如く、虎狼の勇ありて他を知らざる者は之れ無しと言傳へ居れり、實に當時征韓軍の遣り方を見るに、民を撫し國を治むるの手段としては、一も之れあることなく、唯だ日本武士の腕前を見せ、人を殺すこと草の如く聲を聞かすの趣あり、故に従て攻むれば従て取り従て戦へば従て走らすも、是れ唯だ城邑を屠り人民を逃散せしむるに過ぎずして、當時我軍の過る所は、殆ど無人の赤地と變せしが如く見ゆ、是等の惨害は今日に至る迄も我國に對する韓人の恨みを惹き、今日其れをして心服せしむるの一大障碍たるを免かれず、之を思へば、豊公征韓の役や、快は則ち快なりと雖も、今日より言へば却て此事無かりしを可とするやも知れず、古人の記録にも、左の一條あり。

立花宗茂は、人の知る如く征韓の役に武功ありし人にて、當時の諸將よりも長命にて、徳川三代將軍家光の頃迄健在なりし、家光嘗て立花宗茂と夜話の時、朝鮮征伐の顛末を問ふ、宗茂言ひけるは、譬へば團扇にて蠅を拂ふが如し、之を拂ふ

ときは一度に散亂致し候へ共、やがて又元の如くに寄り集まり、如何にも退治し兼ねる者に候、朝鮮人も其の如く、一旦之を撃破することは、手間取り申さるれども、やがて又元の如く寄り集まりし故、遂には日本人も退屈仕ること多く候ひしと、家光之を聴て、尤も左様にあるべし、朝鮮は朝鮮、明は明、其の國々の人民が處を去らぬ様に治めずば叶ふべからずと言はれし云々と。

宗茂の此の物語は、實に當時の状態を、眼のあたり見せしむるが如し、打續きたる百餘年來の亂世に鍛ひに鍛ひし日本武士の腕にて、攻入りし事なれば、韓人が之に抗し得んことは思ひも寄らず、然れども破れば散じ、散じては集まり、數年の間に一州一郡も満足に日本人が其の人民を治め得たることは無かりし如し。

一方に於て日本人は此の如く三百年前に亂入して、武骨一邊の實例を現はしたるに、一方にて支那人は古より文化の淵源となり、彼等を懐柔するのみならず、韓國の徳教、制度、萬事、一切の本家と崇められたり、然れば今日韓人が容易に日本人に心

服せざるも、尤千萬にて、申さば豊太閤の物敷寄の遺毒が、幾らか今日に迷惑を興へ居る場合もあるべし。

最も舊るき電光壕

前條の立花宗茂のことに付き、想起せしは、日本にて攻城の時に電光壕を穿ち、城に迫る戦法を最も早く用ひたるは宗茂なるが如し、關ヶ原の役に立花宗茂が天津の城を攻めし時のことを記せし物に、左の記録あり。

宗茂が、城攻めの體は他に異なり、其の仕寄(城に迫り攻具を据着くるを云ふ)を付くるに、先づ攻口より城に向て、其幅一間半計り、深さは六尺餘り衝かけに、壕を穿ちて、其土を壕の上に揚げ、高さ一間計りの土手とし、軍卒並に人夫は壕の中を往來し、思の儘に竹束を付ければ、城より弓銃を放つと雖も、壕の底土居の陰、を往來する立花勢には、敢て當らず、却て壕の土手より、繁く鐵砲を打

たれ、遂に城の矢間を閉ぢられたり云々。

左すれば、先頃の旅順攻圍の衛がけの電光壕は、日本にて始ての如くなれども、實は立花宗茂が、右の如く衛がけの電光壕を攻城に用ゐたることは明白にて、古人が實驗より生み出だせる工夫は、既に早く三百年の前に在りしなり。

朝鮮征伐の太閤

太閤の朝鮮征伐は、今日に迷惑を遺せしとは言ふもの、此人の大略は、其頃の日本には不相應とも言ふべきものなり、其の征韓の企も、久しかりしと見え、當時の事を記するものを見るに、面白き節も少からず、一書に左の記事あり。

伏見の松の丸を普請の時、太閤は床几に腰をかけ、其前に石田、増田、大谷、杯居れり、時に太閤は大肌脱ぎとなりて、石田を斬る真似をして、一時間計りの談議あり、此時、遠くに居たる間鍋某と云へる者、殿下は變な事をせらるゝとて、眺

め居たりしが、太閤の奥に入られし後にて、間鍋は殿下近侍の士に、其の様子を尋ねければ、近侍の人、内々に申しけるは、殿下は秀次公へ天下を渡され、やがて朝鮮へ撃入られ、朝鮮者を前に立て、明へ撃入らるゝとのことなり、且つ明國には、王が數多ある中に、大王と云ふあり、其の總大王を、先刻は御手打になされ候真似にて、石田が大王の役になり居たる處なり、と語りし云々。

左すれば太閤は大肌脱ぎにて、腹心の面々に、明の王を手打にする處などを、得意に演説せられしこともありと見えたり、又最も可笑しきは、朝鮮陣の頃、太閤は時々作髯をなして出る旨を記載せる書あり、曰く。

秀吉博多宿陣の時言ひけるは、明人韓人は、髯を賞玩すと聞く、然るに我に髯なきときは侮らるべしとて、作髯致すべき由を命ず、早速、細工人を呼で申附けしに、下地を組み上つる、秀吉其の大髯を付け、博多町を押し、那古耶の城に入られし云々と。

明みんに行く早手廻はやてまはしに、作髯つくりひげをば拵こしらえたる杯なごは無邪氣むじやきにて面白おもしろし。
 又朝鮮撃入またてっせんうりいりの時とき、彼國八道かのくにだうの名なを記憶きおくするは面倒めんどうなりとて、大屏風おほびやうぶに朝鮮てうせんの圖ずを
 作つくらせ、八道だうを區劃くわくして、赤あか、青あお、白しろ、等とうの七色しよくに染そめて、平安道へいあんだうは赤國あかくにとか、咸
 鏡道きやうだうは青國あおくにとか定め、下知げちを傳つたへられたり、故ゆゑに其頃そのころの覺書おぼえがき杯なごに時ときとして、青國あおくに撃
 入いりの時とき、赤國あかくに立退たちひきの時とき、杯なごと云いへることを記しせしものあるは、即すなはち是これなり。
 後人こうじんは、秀吉ひでよしが無學むがくにして國名こくめいを記憶きおくする能あたはざるが故ゆゑに、斯かくせしと記きすれども、
 察さつする所ところ、左ひだりにあらず、太閤たいか一人ひとりは之これを記憶きおくするに難かたからずとするも、武道ぶだう一片ぺんな
 る在韓ざいかんの諸將士しよしやうしが、如何いかにして、むづかしき國くにの名なを一ひと々に記憶きおくし得うべきや、夫それ
 故ゆゑに彼等かれらをして赤國あかくに、青國あおくに、白國しろくに、などの稱呼しょうこを用もちひしめたるは、頗すこぶる簡便かんべん法はふなり、
 秀吉ひでよしの祐筆うひつが嘗かつて醍醐たいごの醍だいの字じを思出おもひださずして書かき煩わづらひし時とき、秀吉ひでよし傍そばにて打笑うちわらひ、
 壘たみに大だいの字じを書しよ、之これを書かけ、是こゝにて宜よしと言いひしと、同筆法どうひつはふの樣やうに思おもふ者ものあ
 れども、此この色別いろわけは、當時たうじ無學むがく不文ふぶんの將士しやうしの爲ために甚はなはだ必要ひつそなりしに思おもひ至いたらざる

のみ。

怪談

凡およそ普通ふつうの人事じんじには、定さだまれる規則きそくあり、如何いかに想像さうぞうを逞たくましくするも、遂つひに其その揆かを
 一いつにするに終はる、故ゆゑに小説せうせつの如ごときも、其その舞臺ぶたいを人事じんじに限かぎるものは、其その變化へんかも亦
 た限かぎりあり、獨ひとり怪談くわいたんに至いたつては、人事じんじの拘束かうそくを受けず、人類じんるいの想像さうぞうをして自由じゆうの働
 きを爲なさしむること、無限むげんなるべき道理だうりなり。

東坡とうはが好このんで怪くわいを語なるを聽ききしと云いひ歐米おうべい知名ちめいの士しが時ときとして怪談くわいたんを喜よろこぶものあるも
 蓋けだし之これが爲ためならん、人類じんるいの想像さうぞう力りよくが、如何いかなる程度ていどまで、其その働はたらきを逞たくましくし得うる
 者ものなるやを見み、拘々かうくとして常つねに常軌じやうきを走はる人事じんじの外ほかに逸いつし珍聞ちんぶん奇説きせつを求もとめんと欲ほつす
 るときは、怪談くわいたんこそ唯一ゆいなる筈はずなり。

然しかるに其その怪談くわいたんすら、亦またた千篇せんぺん一律りつなるは、人類じんるい想像さうぞう力りよくの極きはめて狭小けいせうなるを歎息たんそくせ

しむるの外なし、予も怪談好きにて、和漢古今の物語を、随分に多く讀みたる積りなれども、今に至るまで、之れこそ途方途轍もなき一大奇想なりと思ふものに出逢ふたるを覺えず。

怪談の中にも、幽霊亡魂に屬するものは、其の趣味極めて低し、何となれば其の事たる本と人事の範圍内に於て、之れが仕組をなすに過ぎざればなり、故に怪談中にては、之を最下とし、此の以外に於て、妖怪の働き如何を見るを要す。

龍城録

眞面目なる學者先生の筆記中にて、余が見たる怪談の古き一節は、唐の柳子厚の龍城録なり、柳は韓退之と時を同くし、又文章を以て並び稱せられたるは、人の知る所なり、而て其の怪談が、亦た韓退之に關係するに至ては、更に妙とす、之を左に抄記せんに。

夜座鬼を談じて而して怪至る

君誨、嘗て夜座し、退之と余と與に三人、鬼神の變化を談ず、時に風雪して寒きこと甚だしかりしが、窓外に點々として火の明らかなること流螢の如し、須臾にして千萬點、數ふべからず、暫らくして室中に入り、或は圓鏡となりて、飛渡り往來す、忽ち離れ忽ち合し、變じて大聲を爲して去る、三人の中にて、退之の剛直と雖も、亦た之が爲に顔を動かさず、君誨と余とは、但だ匍匐して目を掩ひ、席を前むるのみなりき、信なるかな俗諺に曰く、白日、人を談ずること無かれ、人を談ずれば則ち生を害す、昏夜に鬼を談ずること無かれ、鬼を談ずれば則ち怪至ると、亦知言なり、余三人とも此後ち皆利あらざりき、云々と

左すれば、韓退之、柳子厚の兩先生も、目前妖怪に出會せる次第にて又御幣擔ぎなり、但し右の龍城録は、柳の選述と稱せらるものなれども、其の眞偽も疑ひなきにあらず、同書中の事柄は、柳に非れば知り得まじと思はるゝ、廉々多けれども、同

録全體の文章を、夫の八家文中なる柳文に比すれば、甚だ相違せる如ければなり。支那人の怪を談ずるは、古より珍らしからず、正史と稱せらるゝ左傳の如きさへ、幽霊話、怪談、とも名くべきもの往々之れ有るは人の知る所、左すれば唐以後に至て、怪談の發達せるも怪しむに足らず、唐時代には怪談の書、既に澤山あり、集異記、博異志、集異志、幽怪錄、續幽怪錄、聞奇錄、志怪錄、鬼塚志、幻異志、奇鬼傳、才鬼記、靈鬼志、妖妄傳、夜怪錄、物怪錄、靈怪錄、白猿傳、夜叉傳等の如き枚舉に遑あらず、而して其の筆者中には、褚遂良、段成式杯著名の人物も少なからず。

子不語の一節

明、清、時代のものは、稍や巧みにはなりたれども、大體は唐時代の燒直しに過ぎざる程なり余の知る所の怪談書の中にて後代の大部なるものは、袁子材の「子不語

を第一とす、珍怪の談、其數は百種餘に上れり、其の一二を抄記して前者と比較せん。

熊太史、本と京師の半哉街に寓居せり、莊編修(令輿)と居處の相隣れるが故に、毎夜置酒して互に相ひ往來せり、八月十二日の夜に、莊は酒を具へて、熊に飲ましめ、賓主共に樂しめり、其時桐城相公より人を遣り來招くに依て莊は出去れり莊の早く歸るを知りしが故に、熊は跡に獨酌して之を待居たり。自ら一杯を斟で几上に置きしが、己れの飲まざる中に、杯中の酒は何時しか空し、初は猶ほ己の忘れたるかと思ひ居たり、試みに又一杯を斟で几上に置き、之を伺ひ居し處、藍色の大なる手あり、几下より伸び出で、杯を探る、熊驚て起立すれば、藍手なる者も亦た起立せり、之を視るに、其人の頭も目も面髪も一として藍色ならざるはなし熊は聲を立て大に呼ぶ、兩家の奴僕等悉く來り集る、乃ち燭を執て、隅々まで照し見れども、一物の目を遮るなし。

其中に、主人なる莊も歸り來て、之を聞きしが、熊に戯れて曰ひけるは、君は敢て今夜此室に宿し能ふやと、熊は當時、年少く、氣豪なり、即ち奴僕に命じて、被、枕、を以て榻上に置かしめ、此室に宿するの決心をなし、奴僕をして皆出去らしめ、獨り一劍を持して坐して待てり、其劍は、大將軍年羹堯の贈る所のものにして、將軍が先年青海を平げし時に、人を殺せしこと算なきものなり。

時に秋風怒號し、斜月冷に照す、此室の榻上には、綠紗の帳を施し、空明燈徹なり、街鼓も三更を報じ、夜も次第に更け行くに従ひ、熊は一旦は威張りたるもの、今は少しく心怯れて、遂に寐ること能はざりしが、忽ち几上に鏗然として一酒杯を擲つものあり、再び鏗然として又た一酒杯を擲つ者あり熊笑ふて曰く、酒を偷む者來れりと、俄かにして、一の腿、一の目、一の耳、一の手、鼻の一半、口の一半、東の窓より入來り、西の窓より亦た一腿、一目、一耳、一手、半鼻、半口、進み來る、其狀は人の身體を半分に斷割りたるもの、如く、是等の身體は皆な藍色なり、斯く

別々に進來りしものが、俄に合して一體となり一人の姿を現し、燐々として怒て帳中を睨む、冷氣次第に逼り來り、其帳、忽ち自然にさらさらと開きたり。

熊は溜らず躍出で、劍を抜て之を斫り、鬼の臂に中りしが、恰も徹黎を斷るが如く、遂に手應へなし、然れども怪は窓の方に走て逃去る、熊は逃さじと追掛けて、庭なる一老樹の下に至りし時其姿は消失せたり。

翌朝、主人起て見れば、窓外に血痕あり、急ぎ來て訊問す、熊、乃ち昨夜の始末を語り、怪は此の老樹なるべしとて、之を伐りしに、樹には酒氣を帶ぶ、遂に薪として焚棄てたり。

茲に奇なるは、此家の門番なる老叟なり、年老ひ聾にして且つ瞽なり、其臥す所の窓榻は、乃ち怪物の出入經過する道筋なりしが、此の老叟は前夜も平氣にて、鼾聲は雷の如く、何事をも知らざりしと云ふ。

熊太史は、後ち壽八十を得、其の長子は浙江の巡撫となり、次子は湖北の監司とな

り、一門富貴を以て終りし人なるが、常に笑ふて人に語りけるは、余は怪を見し時に、膽氣と福氣とを以て妖に勝ちたれども、彼の門番の老叟が聾且瞽にして、無意に妖に勝つには如かざりきと。

怪物の仕損じ

余の幼時に、故老より左の物語を聴けり。

昔し或村より隣村に行く途に、狭き谷間あり、夜、此道を通る者は、往往にして、大なる見越入道に出逢ひ、氣絶すること少からず、人皆な怖れ合へり、然るに或夜、隣村の警按摩が其村に招かれ夜更けて獨り自村に歸るとて、例の谷道を通しに、不斗大なる聲を掛くる者ありて、「汝は今途にて此の如き大坊主には逢はざりしや」と怒鳴れり、按摩は何事とも知らず、何を言ふかと容赦なく足踏出せしに、何物かモジャくと足に觸るゝものあり、引捕ゆれば獸にて、犬には小さし、

猫には大きし、手に噛付かむとするを押しつけ、捻伏せて遂に殺し、尙ほ探り見れば、普通の犬猫にあらぬ様なれば、其村に提げ歸り、翌日人々に見せたる處、大狸なりしと云ふ、村人皆な言ひけるは、此の大狸奴が昨夜「斯る大坊主に逢はざりしや」と怒鳴りし時に、若し按摩の眼が開きてあらむには、定めて如何なる大入道か其の前に突立ち居たるならむに、何分にも瞽のこと故、見越入道も其効なく、つい無残くと、生捕られたるならむ、瞽者と知らざりしこそ、狸の大ぬかりとて、皆な打笑ひたりと。

或人、之を評し笑て申しけるは、若し無意無識の赤子に對しなば妖怪は如何にすべき必然其術を施すに由なからん、然らば氣満ち心平かなる大人君子にして赤子の如き、(所謂赤子の心を失はざる者)に對しては、世に妖怪あらんも、亦た其術を施すに由しなかるべしと、戯れながら至言と云ふべし。

大江山入の人数

大江山、酒呑童子退治の人員は、頼光、及び平井保昌、其外四天王共に六人なりとは、我れ人ともにお伽噺に聞く所にて、誰々も斯く思はぬ者なし、又錦繪环にも、大江山入の人員は、以上六人に限るなり、然るに其實は六人ならで、総員五十餘名なる如し。

當時は王朝の末路にて、世間紀綱の廢頽せること甚だしく、洛中をさへ白晝に強盜が騎馬にて往來せしほどの時節なれば、丹波の山中あたりに、強盜住居して、折々都に侵入せしも怪しむに足らず併し如何に無力の群盜なればとて、主従六人にて退治せりとば、ちと受取り難く見ゆるが、尙ほ四十餘名の倔強なる武士を従へしと聞けば、大に理窟あり。

凡そ頼光時代の事を記載せしものとは、先づ謠曲の大江山などに據るの外なし、

謠曲は足利時代に出來しものなれば、頼光時代は百五十年若くは二百年前ゆる、口碑に傳はりしことも多かるべし、左すれば大江山退治に於ては、先づ謠曲などを據りどころとせんに、謠曲の中には左の文句あり。

頼光保昌申すよう、たとひ大勢ありとて、人倫ならぬ化生の者、いづこを境に攻むべきぞ、思ふ仔細の候ふとて、山伏の姿に出で立ち、兜にかはる兜巾を着、鎧にあらぬ篠懸や、兵具に對する笈を負ひ、其ぬしは頼光、保昌、貞光、季武、綱、公時、又名を得たる一人武者、彼是、以上五十餘人、まだ夜の内に有明の、月の都を立いで、云々と、左すれば同勢五十餘人の譯なり。

四天王

頼光の四天王の中にて、渡邊綱は、稍や門地ある人物なり、綱の祖父の仕と云へる

人は、武藏守となりし事あり、綱は源敦の養子となりしが、敦は満仲の婿にて、綱と頼光とは義理の叔姪の間柄なり、貞光季武は四人の中にて、左まで門地の人に非ざる如し、公時も孤兒にして母と共に山居をなしたれども、是も其父は多少由緒ある人物と記せしものあり、然れども三人共に、綱の門地に及ばず。

四天王等の協同の働らきは、種々あれども、一騎打の妖怪退治は、綱と貞光とに限るが如し、綱の羅生門は誰も知る所、貞光は深夜に或河を渉り、怪女に出逢ひ、之を退治せしこと、今昔物語杯にも見ゆ、然れども其の妖が女怪にて甚だ陰氣なる故にや綱の羅生門ほどには、人口に膾炙せず、又公時の一騎打なる妖怪退治は、更に之れ無き如何なる故か、四天王中にて、最も猛者として、兒童に尊敬され居り、畢竟は其の赭顔が得なるもの歟（今昔物語には貞光を貞道と記しありし様に覺ゆ）。

平井の保昌

平井保昌は、動もすれば、誤て四天王の中に數へられ、又は左なきも、頼光の家來同様に思はるゝこと少からず、左れども、同人は門地と言ひ、閱歴と言ひ、實は頼光と相ひ匹すべき人物にて、祖父は大納言をも勤め、父は藏人となり、又備後守、右京大夫、右馬權頭杯にも歴任せし由、保昌自身も、丹後守、大和守、杯を経て右馬頭ともなり、位は四位に至る、總て頼光に譲る所なきなり、（頼光も攝津守、伊豫守、左馬權頭にて、正四位）、左れば頼光保昌は本來、肩を比して並び立つべき人物なり、又保昌は膽智勇決にして、膂力も人に絶し、武藝に精達し、是等の點に於ては頼光に劣らず、文事に於ては却て其上に出づ、唯此人が武門の出にあらずして、通常文臣の家に生れたるが故に、家の子郎黨に於て頼光の四天王の如き者を有せず故に總ての働らきが、頼光の副たりし姿あるなるべし。

此人は和歌を善くせし由にて、後拾遺和歌集杯にも其歌見ゆと云ふ。人品に於て、此人は大に頼光よりも優るが如し、何となれば文武兼備の材なる上に一體の舉動が頗ぶる高尚なればなり、彼が深夜微行して、巨盜の袴垂を威服せし如き、一寸と面白き所あり、時は恰も昌平にして大功業を成すべきの地なく、空しく盜賊退治の副頭領として、後世に傳へらるゝこと、本人に在ては遺憾ならむ。

反對の兄弟、誤傳

世人の好事なるや、反對の人物を、兄弟の如く傳ふること多し、支那の古に於ては、柳下惠と盜跖を兄弟なりと稱し、我が中世に於ては、保昌と袴垂康輔を、兄弟なりと記するものあり、柳下惠と盜跖は、高潔と強盜と反對の兩極、而も此の二人が眞に兄弟たりし實證なきなり、又保昌と袴垂も兩極の反對ながら、是れ亦た兄弟たりし證據なし、唯だ其の誤を來せし所以は、彼の巨盜袴垂なる者は其名をヤススケと

稱へ、而して保昌の實弟も其名を保輔と云ふ、斯く二人の同名なりし爲め、遂に保昌は袴垂の兄と誤認されたるならむ。但し保昌の弟の保輔なる者は、右兵衛尉までも立身せしが、貪戾凶暴にして不法の行ひ多く、後ち獄に下されて死せる由、續故事譚杯にも見ゆ、左れば此の人物を袴垂と同一人と誤まりしも無理ならず、但し保昌と袴垂とは何の縁故も無きなり。頼光の頃にも、四天王のことは、頗ぶる人口に上りしと見え、今昔物語にも、彼の四天王等が、花見に行かむとて、是まで乗りしことも無き牛車を僦ひ出掛けたるに、何が扱て、バネの無き車のこと故、非常に揺られ、簾を垂れ籠めて辛抱せしも、遂に眩暈を催して車に酔ひ、四人とも散々に吐逆して難澁したりなど笑はれ記るされあり。

胡椒から印度帝國

近日諸新聞の報道にては、日英兩國の間に一種の交渉行はれつゝありて、或は現今の同盟規約を擴張し、東は英領印度に及ぼし西は朝鮮半島に達する、攻守同盟の内相談にはあらずやとの評判なり、此際に於て吾々は兎角の批評を差控ざるを得ざるの事情あり、然れども右は早晩兩國間に起り得べき問題なるべし、今日の同盟が利益を兩國に與へしを考れば其の擴張は當然なり。

英の海軍力を以てすれば其の本國は憂なきのみならず、濠、弗の諸屬地も亦た能く之を守るに勝へたり唯だ印度アフガンに至ては、其の防備を陸兵に待つ爲め最も痛心する所ならん。

儲て印度は今日英國に取り、非常に重要な屬地なるが、其初め、英人は如何にして此の大帝國を領するの緒を發せしかを尋ねれば、小粒の胡椒、其物なりしと云へる事實は亦た一奇と稱すべし。

英國が印度占領の發端を吟味するに、千六百年代の終りに於て、其頃印度の貿易を

占有せしものは和蘭人に限りたり、而て蘭人が専ら倫敦の商人に賣込みし物品は、印度産の胡椒にして、英商は總て蘭人の受賣を爲し居りしなり。

從來蘭商が英商に胡椒を賣るの價は、一磅に付き三志なりし、然るに蘭商は更に其利益を高めんとて、俄に之を六志に價上げ、尙ほ引續て、八志まで引上げたり、則ち一倍以上の價と爲せり。

是に於て、千五百九十九年九月二十二日、倫敦の商人は集會を催し、斯る價上げに對して、抗議を爲すべきことを決し、且つ斯く勝手の價上げを受くるは、畢竟蘭人に印度の貿易權を有せらるゝが爲なれば、以後は一會社を組織し、自ら印度地方に貿易を開き、直輸入をなして、胡椒の價を下ぐべしとの相談をなし、此事を政府に申立てたり。

時は恰も、女皇エリサベスの在位にして、女皇は直に之を許可し、印度のモゴール帝に對し、直接貿易を開くべき使節を派遣することに定められたり、斯くして貿易

の道を開かれ、蘭人と競うて英商も始めて東航を始るに至り、夫の有名なるジョン・コンパニーなる會社は始めて茲に勃興せり、然るに此の會社は第一回より第十二回の航海に於て其の資本に對し、十二割の利益を得たり。

是れぞ、英人が印度に其力を注ぎたる序幕にして、是より益々貿易往來ともに頻繁となり、遂に蘭人佛人及び荷人を逐ひ其利益を奪て漸次に印度を蠶食し、今日の大帝國を建設するに至れり、而て其の發端を尋れば、唯だ是れ胡椒の價の一磅三志より八志となりしに憤激せしに外ならず、斯る細事より始めて、遂に二億の民衆を有する一大帝國の建設に終らむとは、實に世事は想像以外の者なり。

釣の暖簾

北京近郊の沼、池、澤、の如き水の停滞せる處にて、鯉を捕る法は頗る奇なり、先づ長さ十四五間、若くは二十間計りの絲に暖簾の如く絲を垂れ、絲の先きには極め

て尖りたる釣を付す、故に釣を垂れたる暖簾と云ふも可なり、又垂絲の長さは一二尺計なり、之を水中に張て其の兩端を竹木に結着け鈴を付く、水中を游泳する鯉、鯰、鮒、の類此の釣暖簾の間を通過するときは釣に懸る、然るときは鈴音を發す、乃ち引上げて之を取る、一見すれば極めて迂愚なる方法なれども、意外に魚を得るものにて、二尺以上の鯉、又は大鯰などの之にかゝるを見たることあり、此の方法は水流の急なる地にては施し難きならむ。

白河の魚

又天津の白河杯の小魚には、邦人の知らぬ魚甚だ多し、其中に、我國の太刀魚の如くにて、尙ほ一層扁平、肉の薄き魚など、澤山漁獲し得べし、試に一尾を購ひ調理せしに、頗る、まづし、名を記するに足らず。

北支那の豆腐

豆腐は支那が本家にて、遠く漢の時に始まり、有名なる淮南王の工夫に係ると云傳へ、今日も北京邊には盛に之を製し居り、大體は本邦の者と異ならざれども、唯其の焦げ臭きには閉口なり、上海以南の者は、此の臭ひ無しと云ふ、日本の絹ごし杯の如き上製の品は甚だ得難し。

又北支那にては、コンニャクの製法を知らず、絶て此物なし、或る邦人、之を製し賣捌かんと企てたれども、急に廣まる見込なしとて中止せり。

一生不賦海棠詠

支那の蜀は、海棠の花にて有名なる土地なり、然るに詩人杜子美が同地に在ること數年なりしに、曾て海棠を詠せず、故に東坡の句にも

恰是西川杜工部

海棠雖好不留題

とあり又鄭谷も

浣花溪上堪惆悵

子美無情爲發揚

の句あり又放翁なりしか

一生不賦海棠詠

亦是微臣愛國心

等の句あり、子美が此花を詠せざりし所以の説、種々ある様なるが、此頃、一書を編きしに、子美の母の名が海棠と云ひし爲なりとの考證あり、此説、是に近し。

佳句

支那にて、或人の作なる

南風吹斷採蓮歌

夜雨新添太液波

水殿雲樓三十六

不知何處晚涼多

との宮詞を見て之れはたまらぬ名吟なりとて、忽ち其人を己の妹婿にせしと云へる話あり、左の詩の如きも亦た稍や意味を同くす。

忽聞天外玉簫聲

花底徐行獨自聽

三十六宮春一色

不知何處月偏明

然れども、前詩の方、餘意ありて優れり。

劉基の詩

詩は題を、よく知らざれば、作の妙を解し兼ねること多し、和歌とても同様なり明の太祖を助け天下を統一せし謀臣劉基が、箸を詠するの詩は、絶句類選などにも有りて往々人の知る所なるが、或書に劉が、之を作りし常時のことを記して曰く、劉が始めて太祖に謁し事を論せし時、太祖は之と食を共にし、「先生は詩を能くするや」と問ふ、對て曰く、某固より儒生なり、聊か其の心得ありと、太祖、乃ち其の

持つ所の斑竹の箸を詠せしむ、劉、聲に應じて曰く

一對湘江玉並看

二妃曾洒淚痕斑

と太祖、悦びずして曰く、句は即ち佳なり、然れども尋常秀才の意味ありと、劉、又二句を繼で曰く

漢家四百年天下

總屬留侯一借間

と、太祖感服せしと云ふ、右は天下を統一するに好き縁喜にて、又た王者に對し當意即妙と云ふべし、併し之れも劉の句に因て、後人の作りし物語なるも知れず。

支那人の詩思

支那人の詩思に巧なるや、上は金銀珠玉より下は糞溺土塊に至る迄、其の題詠に入らざるものなし、或人の詩に曰く

視之不見名曰希

聽之不聞名曰夷

不啻若自其口出 人皆掩鼻而過之
と是れ何の詩たるを知るや。

西施の行末

越より美人西施を呉に贈り、呉王を色に溺らして、呉を亡したりとは、人の知る所なるが、此の美人の末路を詮鑿する好事家あり、其説に漢以前の書には、殺されたるものとし唐以後に至つて、范蠡に載せられ五湖に遊びし杯の説を生ず、吳越春秋にも吳亡し時、西施は殺さるとある由、又墨子にも、呉を破りし後ち、越人は西施を江に沈めたりと記す、唐宋以後に至りて始めて此の美人が范蠡に伴ふことを記す、或人の説に、吳の亡し後ち越は西施を江に浮べて鴟夷に從はしむと吳書にあるは即ち吳子胥の死せし時、盛るに鴟夷を以てせしが故に、子胥の迹を追はしめて水に溺らせしと云へる意味なり、然るを范蠡が世を逃れて鴟夷子と號せしが爲め、後人は之

を誤り、詩人等相率ひて遂に范蠡が連れのみたりと云へる説を生じたるなりと、特に穿ち過ぎたる詩人の如きは

載去西施豈無意

恐留傾國更迷君

の句あるに至るも可笑し。

南荒に住人あり

支那にて美人の産地は、方今、蘇州を本場とすること、恰も我國の西京に於るが如し、然れども古昔の美人は多く南荒とも稱すべき南邊に出でたり。

楊貴妃は廣西省の産にて、人の養女となり、轉々して楊家の養女となりしものなり、又晋の石崇の有名なる美人綠珠も同く南蠻の産なり。

仙人騎鶴

昔し我國の田舎にて、仙を學びし人あり、道書に依て、殺を斷ち、欲を斥け、練修年あり、自ら謂ふ、我が必持、既に上昇するを覺ふと、乃ち二階の窓を開き、空を踏んで昇天せむと欲するや、忽ち地上に墜落して大怪我をせしと云へるが、支那にても、之に類する笑話あり、明の頃、廬山に道士ありて、深く道を修せしが、一日白鶴あり翩然として飛で其庭に止まる、道士喜で思ふ、是れ上帝の我を召すなりと、乃ち鶴を捕へて其背に坐せむとすれば、鶴は堪得ずして、へたばれり、斯る譯は無き筈と、頻に其背に坐し、遂に鶴を乗殺したり、此鶴は元と或家に飼ひし者が放れて飛來りしなりければ、飼人より之を官に訴へ出で、道士は非常に叱責せられしと云ふ、其時或人、一絶を賦し之を嘲りて曰く

陷肉先生欲上昇

黃雲踏破紫雲崩

龍腰鶴背無多力

傳語麻姑借大鵬

阿 瞞

阿瞞が曹操の幼字たるは人皆之を知る、然るに唐の玄宗の幼字も亦た阿瞞なりとて其證を擧げしものあり、實に然るに似たり、蓋し幼時には呼易き名を付するが故に、其の同名なるも怪しむに足らず、然れども孟徳の阿瞞が最も著はれし故、若し唯、阿瞞と言はば孟徳に限るが如し。

正 儀 と 文 璧

楠家の一族にて正儀は節を失ひしとの説あるが、父子兄弟も人は各々心々なりと見え、文天祥の宋末に於ける節義は有名なるものなるに其の實弟なる文文溪(名は璧)は、宋の時、惠州の知事たりしが、宋亡て元に降り身を全ふせり、天祥の一子は文溪の家を繼ぎたりとの説あり後人が文溪を詠せし詩に云く

江南見説好溪山

兄也難時弟也難

可惜梅花各心事

南枝向暖北枝寒

健忘

佛國の有名なる小説家フォンタネー氏は、頗る世事に無頓着なるのみならず、極めて迂濶とせし行動多く、人の笑話となることありし由なるが、此人、嘗て友人の葬に會せしに、三週間ばかり経て其の亡友の家を訪ひ、而會を求め、家人より「三週間前に死去せし」と聞き、非常に喫驚せしが、稍や沈思せし後ち「然りく御葬式に参りしことを今ま思出せし」とて、匆々に立ち歸りしと。

道灌の辭世

太田道灌が刺客の爲めに槍もて刺れし時「かゝるとき、さこそ命のおしからめ」と

呼びかけられ「かねてなき身と思ひ知らずば」と答へたりと云ふ、刺客が人を殺しながら、歌を詠みかくるもちと變ながら、道灌も餘りに悠長なり、蓋し是歌は本人が他人の事を詠せしものならん、主暗く人嫉むの境遇に在て身を全くし難きは、道灌の明、豫て覺悟し居りたるべし、其の最期に何の未練か有らんと、此人の心事を推し量り遂に辭世として誤り傳へしものと見ゆ、同じ死生の際にても義家貞任の應答は事實なるべし、兩々相ひ當る古の戦は頗る悠長なるべければなり、貞任宗任は東北の世家なり、相應の教育を受け居りたる如し、宗任に對して殿上人が赤面せしは當然のみ。

支那の弓

支那にて用ふる弓は昔より半弓にて、我國の如き大弓無し、現在滿人などが射を習ひ居るものを見るに、何れも半弓なり予は彼の地に在りしとき、一日試射場の邊を

過りしかば、馬を降り彼等に請ふて、試に一二發を放らしが我大弓に比すれば、甚だ控き心地悪し、是れ其弓の短きが爲に、控き初むる二三分は弓の力を甚だ弱く感じ、六七分を控くに至りて俄に強く感じ、我大弓の如く控き初むるより控き満るに至るまで、素直に漸々と弓の強きを感じるの妙なければなり、從て矢の飛び方も素直ならず、併し昔より支那は騎射を常とし、騎兵は馬上の携帶に便なるを選む爲め半弓を好むものと見へたり、我が大弓にても強て馬上に用ひられざるにあらねども、長きに過ぐるの不便を免れず。

支那の矢

支那北地に於て用る矢は、竹にあらすして木なり、木矢は直くして輕しと雖も、竹を用ひるの利に如かざるが如し、是れ北地には竹無くして、木を用ひるの已むを得ざればなり、又た彼國の射術は、我國の遠矢を射るが如く、度をかけて半圓形に飛

ばしむるを主とす、近距離にても此風あり。

老兵の一小隊

米國革命の戦に、老兵八十人を以て組織せる一小隊ありて、種々の助を革命軍に與へたりと云ふ、此隊にては七十歳の者が最年少者にて、其の隊長は九十餘歳なりしと、是等の人々は元と皆な日耳曼よりの移住者にして、渡米前には歐洲諸國の戦亂に幾んど三四十年、兵間に武功を著はせし者共なり、晩年に至て殺伐なる兵事に倦み、平和の餘生を送らんとて、米國に移住し、干戈に換ふるに耒耜を以てし、樂しき残年を過しつゝありしに、又もや革命の戦起り、老年ながら傍觀するに忍びずとて、老人同志申合せ相結で義勇兵の一小隊を作せしなり、而て其の軍帽には皆な黒紗を纏ひ居たりと云ふ、蓋し老年に至るも尙ほ干戈を操らざるを得ざる人生の悲みを表せしなり、數十度の場敷を経たる此等の老兵の働は、革命軍に益する所多くして

其の國に報ゆるの意氣、壯者も及ばざるものありしと、斯る老人隊は、歴史中に稀有なるが如し。

吝 嗇

世人は甚だしき吝嗇者を賤めども、是れも殆ど天性にて、如何共し難きものと見ゆ、有名なる英國の將軍マアポロー侯が國家に功勞ある人物たるは人の知る所なるが、此人は非常の吝嗇家にて、此の一事は折々興のさむること少からざりしと云ふ、嘗て人と骨牌を闘はせ、五十錢ばかり贏ちたるに、相手方は持合せの金なしとて斷はりしに、中々承知せず、今より歸宅の車賃に必要なればと迫り、相手方は餘儀なく人より借りて之を興へたり、其の歸路に果して車を憊ふや否やと、人皆な其後を跟け行きしに、侯は居室まで僅か十二錢ばかりの車代を儉約し、深更にも拘はらず、ボク／＼と歩るき歸りしと。

無言の使節

昔時は、謎を解くこと人智の一と看做されたりと見へ、古史には往々に謎話多し、波斯王ダレスが、スシチアン人と戦ひ、大兵を以て其國に侵入し、互に對陣せしとき、敵軍より大使來り、一羽の鳥、一頭の鼠、一匹の蛙及び矢一筋を齎し來れり、其の大使は鄭重に「某は國人の命に依て此の四品を齎らし來れり、其の使命は此の四品の中に籠れり、他に述べべき言辭なし」とて、其僅に辭し去れり、是に於て、波斯の軍中には、此謎を解くこと一大問題となりしが、ダリス王は、先づ喜で之を解て曰く、鳥は天を翔るもの、鼠は地を掘るもの、蛙は水を潜るもの、矢は兵器を代表す、然れば、朕の武威に恐れて他の列國の服従する如く、此の國人も、其の天と、地と、川と、兵器とを捧げて、我に降を乞ふものなりと、然るに王の七大將の一人たる參謀ゴブリヤスは之を非として王を諫めて云ひけるは、是れ降

を乞ふにあらす却て敵意を表するものなり、鳥の如く翼ありて空を飛び、鼠の如く地を掘り出で、蛙の如く水を潜て遁るゝに非らんば、我が此矢の爲に、汝等は絶命すべし、との意味なり、此回の戦は最も味方の注意を要すと解きしが、果して、スシチアン人は直ちに勇敢なる戦を開き、波斯軍を破り走らせたり。

追々々に

又百年計り前の由、ジョン、ロビンソンなる英國の一富豪は、前に記する程にはあらねども、我物を愛惜すること極めて甚だしく、一頭の名馬を蓄ひしが、曾て之に騎したるを視しことなく、己自ら常に馬の口を取て何處にも馬と同行すること年久しく、人より「何故に乘らずや」と問はるれば「イヤ追々乗ります」と答ふるのみにて餘り大切に蓄ひしが爲め、数年の後ち此馬は運動の缺乏より、主人を乗せしことも無く遂に斃れたり、又美事なる獵銃及獵犬を所有せしが、一回も之を實用に供せ

しことなし、人の問ふ者あれば例に依て「イヤ追々に使ひます」と言ふのみ、其の獵犬も年久しき間、一回の實用をもなさずして遂に死せり、此人は八十五歳にして死せし由なるが、死する二三週前にも、銃獵用の新たな鳥打袋を求めたりと云ふ、蓋し我が所有品を何れの時にか用んとするが、唯一の樂みにて、實際之を用る人より見れば抱腹に堪えざれども、其心中の樂みは、矢張り同様なるものと見ゆ。

ソリヤ火事だ

火災保險杯の仕組ある今日は難有けれ、昔し江戸にて或る節儉家が其家を新築する爲に必要な數千金を積み得たるに、容易に之を使用せず、毎日々々新築の繪圖面を取出し、現金を其上に並べて之を眺め、忽ち自ら「火事だ」と叫で、直に其金と繪圖面とを收めて曰く、先づ安全なり」と、斯の如く眺め樂むこと十數年、遂に新築を爲さずして死せりと云ふ、他人より見れば笑ふに堪えられども、心の樂み

は亦た一種のものなるべし。

羽 蒲 團

今西洋諸國にて、蒲團の中に、綿を入れる、代りに、鳥の羽毛を入れる、者あり、近頃
は我國の贅澤家も之に倣ひ、之を羽蒲團と云ふ、西洋にては、婦人の枕、及び椅子
の飾蒲團等に多く之を用るがブク／＼として彈力強く、頗る心地よきは人の知る所
なり、右は西洋人のみの工風と思居たりしが、此頃支那の古書を見れば、千年以前
に同國には既に之れ有り、唐の段公路の北戸録の中に、之を鷲毛被と稱す、曰く、
邕の南の酋豪、多く鷲毛を以て被となす、其の溫軟なること綿絮に下らず云々と、
左すれば支那の羽蒲團は、西洋よりも舊きなるべし。

無風獨搖草

前に記したる北戸録は唐代に出しものなるが、其中には頗る奇々怪々、殆ど想像
の及ばざる面白きことを記す、蓋し亦た博物志の一種なり、其の最も奇なるは、媚
藥の中に、無風獨搖草なるものを記す、男女之を帶ぶれば、相ひ媚ぶ云々と、無風
獨搖とは其名稱既に絶奇なり、但し其物の如何なるやを詳記せざるを憾む。

媚 藥

支那の古人が媚藥と稱する物、種々あれども、大抵は皆雌雄相思の情多き物を以て
之に擬す、恰も我國にて雌雄の守宮の黒燒を之に擬するが如し、北戸録に鶴子草を
記するの條に曰く、草、蔓延して春には雙蟲を生ず、常に其の葉を食ふ、土人收め
て之れを飼ふ、蛻して蝶となる、女子之れを帶ぶ、媚蝶と稱す、即ち媚藥の一なり、
凡そ是れ等の類は皆大抵諸國とも想像相ひ似たり。

無核の荔枝

但し同書の中に、荔枝の核なきものありと記す、曰く、吳州の火山に在るもの、初夏に先づ熟して而て味少しく劣れども、其の高潘なるもの、最も佳なり、五六月に至り方に熟す、無核のものあり、鶏卵の大きに類す、其肪は瑩白にして水晶に滅せず、性熱にして液甘し、即ち奇實なりと、果して無核のものならば、實に奇菓なり、何となれば、凡そ荔枝の類は、割合に其の核の大なること人の知る所にして、此の菓に於ては唯此の一事を缺點とすればなり。

蜂雀歟

同書は荒誕無稽の記事多き様なれども稍や其實を得るものも少からず、其の郭子横記を引て記する條に曰く、勸畢（外夷の國名と見ゆれども今考ふべきなし熱帯下の

孔雀の捕方

小邦なるべく見ゆ）より細鳥を獻す、方一尺の玉籠の中に數百羽を盛るべき程に其形小なり、鳥の大き、蠅の状の如く、聲は鸚鵡に類す云々と、察するに此の鳥は蓋し今の動物家の謂ふ所の蜂雀の類ならむ（上野の博物館などにも、多分剝製の見本あるべしと思はる）是等は千年前、既に支那人の知る所となりしなり。

昔時支那にて孔雀を捕る方法を記するものあり曰く、南方の雷州羅州等にては、孔雀の雛を捕來て之を飼ひ、十分に馴れたる時、之を孔雀の棲居せる林間に持行き、糸にて其足を繋び、其傍に羅網を施し置き、潜に之を窺ふ、野孔雀之を見て多く來る、然るときは網を倒して之を蔽ふ、一時に多數の孔雀を獲るに至る云々と、然れば今の我國に於ける、雉の囿を用ふる者に同じ。

囿にて鳥を捕るの法は、支那にては舊くより有りしこと見え、説文に曰く、鳥を

捕る者、生鳥を繫いで以て之を致たす、名けて鵠と云ふ、此字の音は由なりと、此の方法の彼國に傳はるや久し。

蚊母鳥

又最も奇なるは、北戸録に、端新州に鳥あり、其の大き鳥の如くにして而し嘴大なり、常に池塘の間に在て魚を捕へて而て食ふ、一たび鳴く毎に、即ち蚊子の群有て其口より出づ、此鳥の名を蚊母と云ふ、蚊を吐出すを以てなりと、右は大廣志に亦た其事を記すと云ふを以て見れば、何やら全くの虚記にもあらざるべく思はる、が、ちと受取り難き話なり、動物家に聞て見たし。

竹蛇、小兒樹

我國にては、薯蕷が鰻になると言ひ傳へ、現に薯蕷の半ば鰻に化し居るを見たりと

云ふ者ある如く、支那にても大元年中に汝南の人、山に行て樹を伐る、一竹を見る、其の中央は蛇の形已に成り、其上は枝葉、元の如し云々と、如何にも薯蕷が鰻となる以上は、其形の類する所より、竹も蛇になり兼ねまじき譯なり、然れども殊に奇なるは左の記事とす、會要なる書に曰く、大食國は西のかた大海に隣りす、嘗て人を遣て船に乘らしめ、八年を経て未だ西岸を窮めず、海中に一の方石あり、石上に樹あり、其幹は赤く、葉は青し、小兒を生ず、丈け六七寸、人を見て皆な笑ひ、其の手脚を動かす、樹枝に着き居るが如し、其枝を摘取れば小兒即ち死す云々と、小兒が樹に生るに至つては殊に奇々怪々なり吾々が西遊記中にて讀みたる夫の人參菓なるもの、外に、斯る奇想あるなし。

比目魚

併し千年前の支那内地の支那人は、今日我々が常に見る所のものをも、餘程に奇に

感せしと見え、北戸録の中に、不思議さうに、比目魚のことを記して曰く、比目魚、一名は鱧、南越志に之を板魚と云ふ云々とて、左も珍らしさうに記載せり、成程見慣れざる者より之れを見れば、比目魚の姿は頗る奇に見ゆるなるべし、臨海異物志に曰く鰈魚は指の如し、長さ七八寸、但し脊骨あり、曝らして燭となす云々と、蓋し海魚には鱗多し、其の干物を夜闇中に於て見れば、鱗の爲に光明を放つものなり、右を斯く記したるに非る歟、同書に橄欖子のことを記する杯は總て其實を得たり。

睡蓮、夢草

又睡蓮の状を記するに曰く、葉は苻の如くにして而て大なり、水面に浮ぶ、其花、葉を布くこと數重、夏に至り晝は開き夜は縮て水底に入り、晝又出づるなり云々と、此の睡蓮の種類は、今日我國に渡り居れりと聞く、蓋し西洋舶來ならむ、然れども

支那には、千年前、既に之を記すること右の如し又睡蓮に反對して夢草なるものあり、此草の花は、晝は地に入て、夜は即ち又地に出づ、兩者相反す云々と、吾々は未だ此物を見ず、然れども此類は實有のものに相違なかるべし。

北清の白魚

同一の魚種にても、國々に依り其の大小同じからず、邦人の賞翫する白魚も、日本國內にてすら、大小種々なるが、支那天津附近のものに至ては、驚くべく巨大なり、其の大なるものは、六七寸より八九寸に近きあり、其の四五尾をフライとすれば、優に一人前に供するに足る、而て味亦た佳なり、日本にても予が郷里などものは、長さ僅か一寸餘に越えずして味極めて細かなり東京の者の二寸以上に及ぶが如きにあらず、其他諸州の中にて仲春に至り膳に上るものは、其長さ總て大なり、然れども未だ支那の白魚の如く巨大なるものあらず。

一時に六藝

一人にして、一時に諸種の藝をなす者なきにあらず、唐の朝野僉載に、神仙童子と稱せられし元某の事を記して曰く、此者は同時に於て、左手にて圓を畫き、右手にて方を畫き、口には經書を誦し、目には群羊を數へ、兼て四十字の詩を作り、足には五言一絶を書き、以上六種の事柄を、齊しく同時に成し得るを以て、神仙童子の號あり云々と、斯く手、足、目、腦、を一齊に使役して、皆其用をなすに至ては、蓋し亦た奇なり。

然れども心理學より觀察して研究すれば、右は強ち不可能のことにあらず、何となれば、彼の心理學に記する所の腦の力の頻繁なる變轉に過ぎず、先づ左手に氣を配り、直に右手に氣を配り、口と目に氣を配り、足に氣を配る、其腦の作用が、閃電の如く、各部に轉輾して之を爲さしむるにて、其實は腦が同時に此の六作用をな

すにあらず、唯だ各部に働く轉輾の速かなるに在り、故に心理より論ずれば、決して不可能の事にあらねども、唯だ常人に在ては其心が一方より一方に轉ずる間、甚だ鈍くして此藝を爲し得ざるのみ、一心同時に六部に働らき得るにあらず、一心が六部に轉輾するの神速頻繁なるに外ならざるのみ。

猩々の面相

猩々が酒を嗜むと云へることは、支那にても千年以前の書に之を記す、然れども其顔、赭色にして、髪、毛、棕櫚の如しとは記せざるのみならず、左の如く記載す、安南の武平縣の封溪の中に猩々あり、媽として美人の如し、人語を解し酒を嗜む云々と、然れば此記に依るときは猩々の人品は頗る美しきもの、如し、數千年前の禮記に、能く言ふ云々と記したれども、其頃は未だ猩々が酒好きとは記載されざりし、何時の頃より斯る上戸とはなりけるにや。

巧思の人の形

予が曾て倫敦に在りし時、内國博覽會の場内に、或る慈善會より出品せし人形あり、大さ十四五歳の兒童に等し、手に慈善者の義捐する錢入れの函を携ふ、其傍を過ぐる所の人、若し義金を其の函中に投入するときは、此の人形自ら手にて帽を脱し、少しく身を屈め拜するの状をなし、又帽を取て頭に置き直立す、人皆此藝を見むとて、相集て義金を投入せり、其の收入は定めて豫想到に倍せしならむ、右は良き工夫なりと思ひしが、千年前の書なる朝野僉載の中にも左の記事あり。

將作大匠の楊務廉は甚だ巧思あり、嘗て泌州の市内に於て、木を刻みて僧となし、手に一椀を執らしむ、自ら能く錢を乞ふ、其の椀中の錢盈つれば關鍵忽ち開き、自然に聲を作して布施と云ふ、市人競ふて其の聲を作すを見むと欲し、錢を施す者日に數千に滿つ云々と、然れば支那にて千年前に此の工夫を廻らせし者もありし如し。

誤字、誤植

著述作文など、起稿の時に、うかと、書き誤りしものを、再三校正の後に之を見出し得ずして其儘に出版し、後に至り心附くこと、何人も少からず、支那にも「書を校するは落葉を掃ふが如し、從て掃へば從て多し」と云へる諺ある如く、見れば見る程ど初稿に不行届の點多く、根氣盡きて、後には宜加減に切上ぐることも多し、吾々の如き粗鹵家に在ては、草稿を自分が十分に満足する程校正を爲し得たりと思ひたる例なし、殊に活版を用ゐる時代には組方が文字を誤ることも亦た少からず、歐米も同様にて、先年英國にて或る有名の文學者の著はせし戀愛小説中に、大切な一段あり、「彼女を「キッス」(接吻)せし」とありしを植字方が誤りて「キック」せしと爲し、「彼女を蹴飛ばしたり」との意味に一變せし爲め此書の出でし時は世間にて大笑

となりし話あり、又吾々の如く常に速記を用るものに在ては、其誤り一層多し、速記者も十分に心得居りながら大急ぎの清書の際には、うかと同音の字を用る、著者も氣附かず其儘に世に出ることあり、例せば「絶世の佳人」とすべきを「絶世の歌人」と記するの類にて是位のこととは速記者も心得居りながら、つい、うかと同音の字を用ひ著者も氣附かず其儘と爲る、實に著書著作は何かにつけ誤り多きものなり、況や「探る」「取る」「捕る」又「則ち」「乃ち」「即ち」「輒ち」等の字の使ひ別けを一々に當嵌るやうに記するは大いなる骨折なり。

明治三十八年九月十一日印刷
 明治三十八年九月十四日發行

定價金四十五錢

著 者 矢 野 文 雄

發 行 者 合 名 社 近 事 畫 報 社

代 表 者 東 爲 雄

印 刷 者 東 京 市 神 田 區 錦 町 三 丁 目 一 番 地
 長 谷 川 辰 二 郎

印 刷 所 東 京 市 神 田 區 錦 町 三 丁 目 一 番 地
 小 川 印 刷 所

東 京 市 京 橋 區 五 郎 兵 衛 町 二 十 一 番 地 (電 話 本 局 二 四 四 八 番)

發 行 所

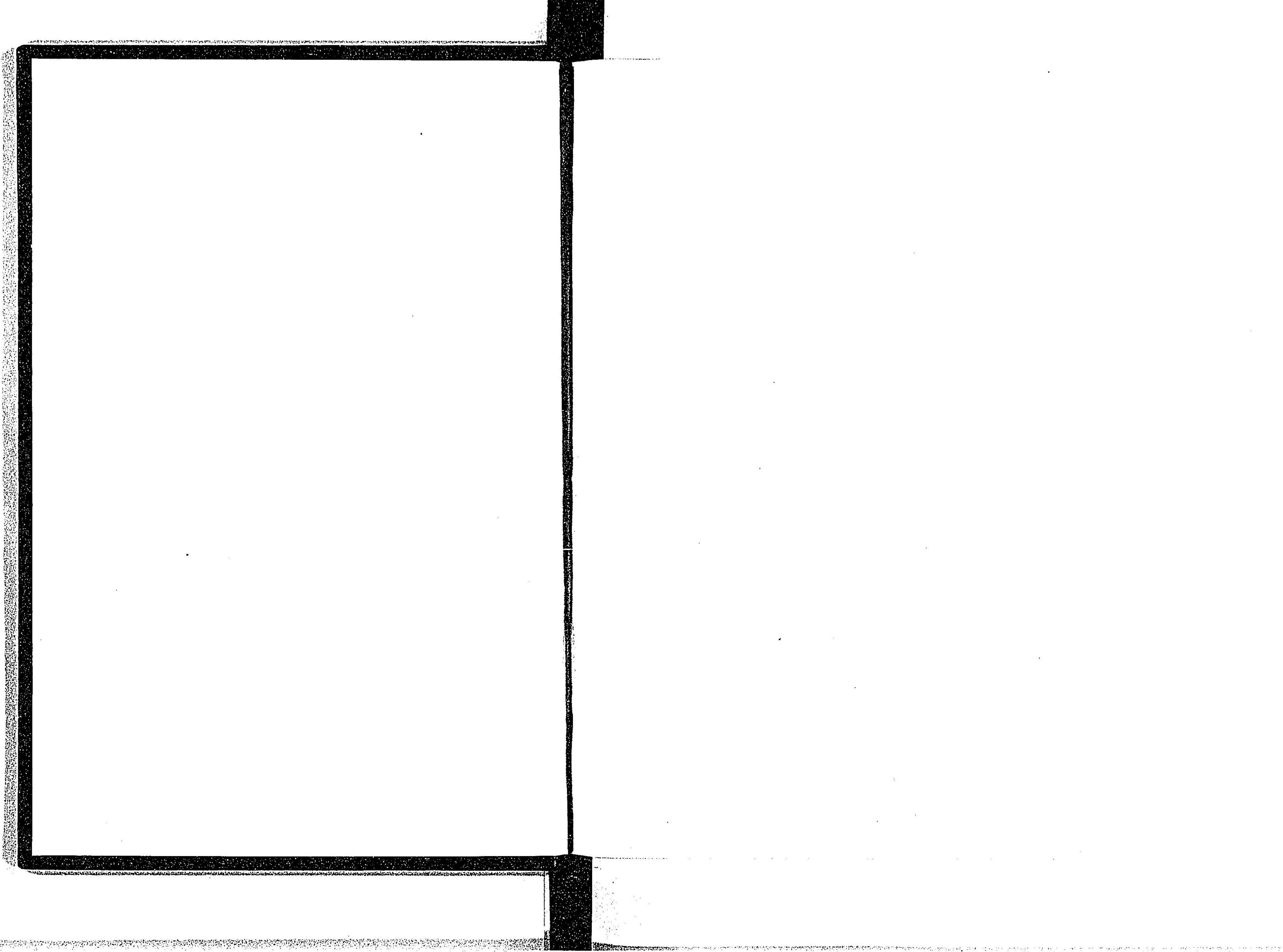
合 名 社 近 事 畫 報 社

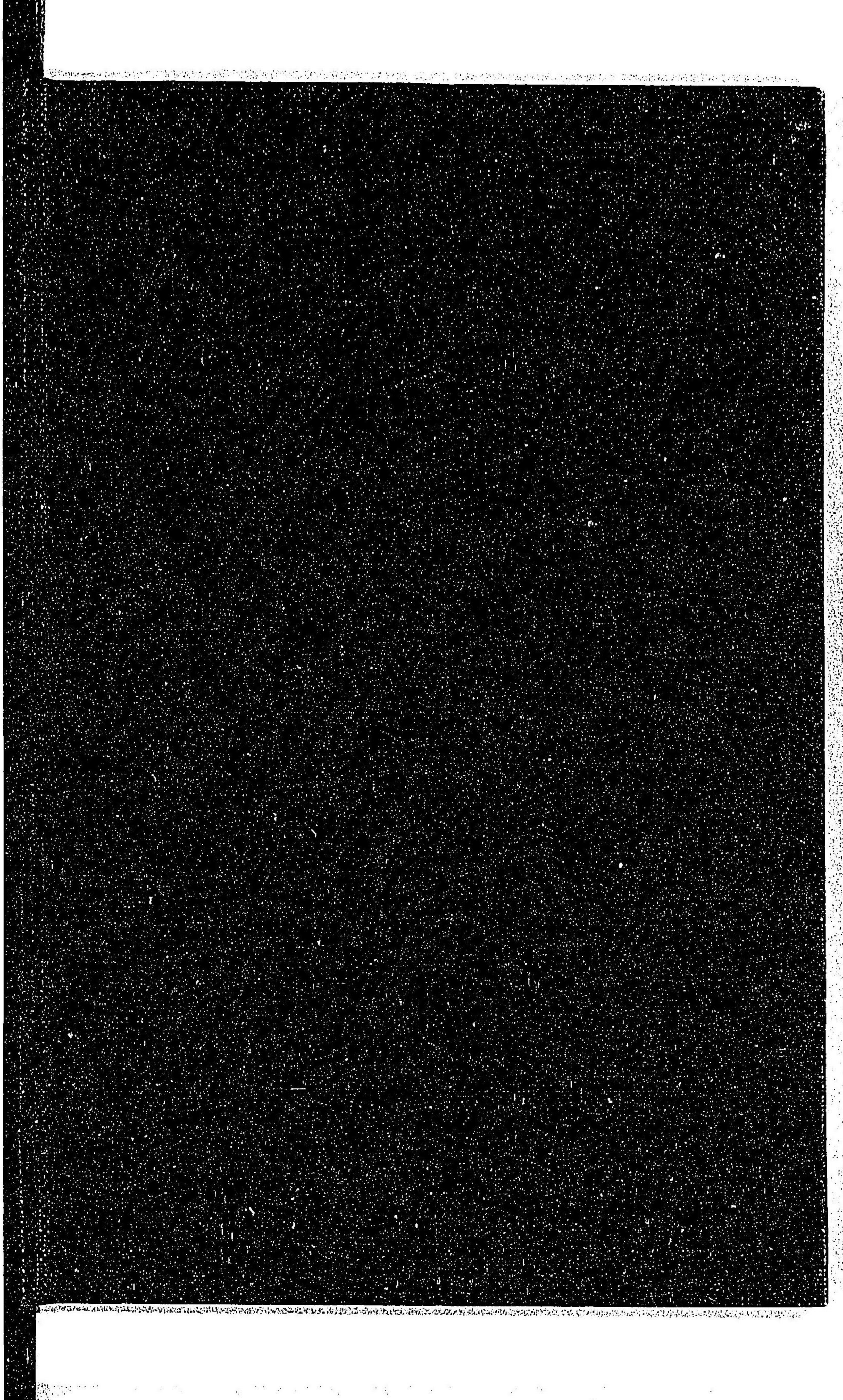


世界に於ける日本の將來 (九版) 全一冊

定價金二十五錢 郵税金四錢

此書は世界の治亂 列國 離合の 一大未來記にして、其間に於ける日本將來の立場を明記し如何にせば日本が世界人類の福利に一大貢獻を爲し得べきやの 前途を描出す、今や日本の百事は一として世界の趨勢に左右せられざるもの莫き時に當り 世界治亂の未來記と日本の前途は我國人の必ず心得居らざる可らざる一要件たり本書こそ 何人も是非一讀し置かざる可らざるものとす





98
177

102392-000-0

98-177

出鱈目乃記

矢野 竜溪/著

M38

EAG-0253



